



FD Newsletter

FD NEWSLETTER

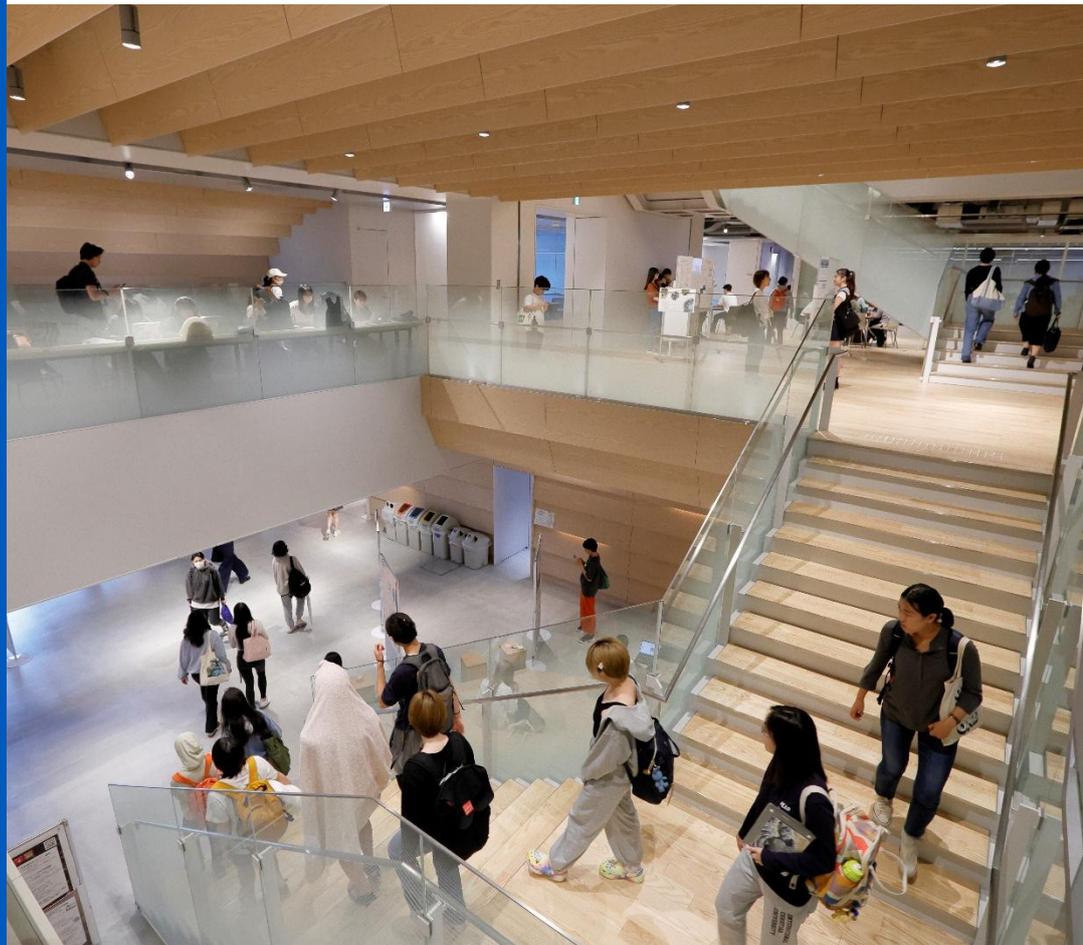
CENTER FOR  
TEACHING AND  
LEARNING

INTERNATIONAL  
CHRISTIAN  
UNIVERSITY

TOKYO, JAPAN

Vol. 29

March 2025



2024 年度 FD ニュースレター

発行：国際基督教大学 学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning

International Christian University

1F, Othmer Library, 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan

Phone: (0422) 33-3365

Website: <https://office.icu.ac.jp/ctl/>

Email: [ctl@icu.ac.jp](mailto:ctl@icu.ac.jp)

## 目次

AY2023FD/SD セミナーから「合理的配慮」を改めて考える 学修アクセシビリティ支援室 田中佑典	3
建物のデザインを皆で考える——学内アクセシビリティツアーより 学修アクセシビリティ 支援室 田中佑典	4
「Q サポ」— 学生同士の学び合いコミュニティ 学修・教育センター	6
生成 AI の現状：大学教員として知っておきたいこと 学修・教育センター センター長 那須敬	10
数学と人工知能 自然科学部門 松村朝雄	15
日本語教育と生成 AI 日本語教育プログラム 小澤伊久美	18
「あなたみたいな人は、毎年一人か二人くらいです」ICU のアドバイザー制度について 考える 学修・教育センター センター長 那須敬	23
学生の自発的学修を促す多様なアドヴァイジング 2023 年度の APS、IBS の利用状況とケ ーススタディーより 学修・教育センター 村上絢香	26
CTL Brown Bag Lunch & Learn 報告	31
「GEN028 社会における統計分析 ご紹介」実施報告 政治学・国際関係学部門 大森佐和 自然科学部門 清水勇二 社会・文化・メディア部門 森 木美恵	31
EMI（英語教授法）：学生をアクティブ・ラーナーにする方法 人文科学部門 アムール=マヤール, オリビエ	34
すべては一日目から始まる：ノートカード、カラーマーカー、自己紹介の力 歴史学デパ ートメント ポーランド, ジャネット	36
QALL402:現場実習による専門学習 社会・文化・メディア部門 ボンディー, クリストファー 社会・文化・メディア部門 鄭朱泳 自然科学部門 峰島知芳	39
私の先生 ~教えることについて、自分の教師から学んだこと~	42
第3回 人文科学部門 伊藤亜紀	42
第4回 社会・文化・メディア部門 青沼智	43
2024 年度 FD 活動一覧	45

## AY2023FD/SD セミナーから「合理的配慮」を改めて考える

学修アクセシビリティ支援室 田中佑典

2024年5月

2024年2月19日、2023年度FD/SDセミナー「「合理的配慮とは何か」を問い直すー2024年4月改正障害者差別解消法施行に向けて」を実施した。京都大学学生総合支援機構准教授で、DRC（障害学生支援部門）チーフコーディネーター、HEAP（高等教育アクセシビリティプラットフォーム）ディレクターの村田淳先生を講師にお招きし、約70名の教職員が参加した。村田先生は、京都大学における障害学生支援に従事されており、組織的な支援体制の構築等を担う一方で、障害のある学生に関するコンサルテーションなど支援現場での活動にも取り組まれている。

日本では、2024年4月から改正障害者差別解消法が施行となり、私立大学を含む民間事業者についても障害者に対する合理的配慮の提供が努力義務から法的義務となる。また、日本国内でも、ICU内でも、障害のある学生数は年々増えている。支援を必要とする学生の増加に伴い、「合理的配慮」という言葉自体は、既に学内の先生方にも浸透してきている。しかし、「合理的配慮」とは何か、どのように配慮を行うべきかに関する理解は、先生によって様々なように感じられた。そこで、「合理的配慮」の定義を問い直し、教職員の間で共通理解を得る機会として、2023年度のFD/SDセミナーを実施した。

村田先生には、合理的配慮について、理論や定義の面から改めて説明いただいた。合理的配慮とは、機会の平等を促進し、差別を撤廃することを目的に、日常生活や社会生活を営む上での障壁（バリア）になっているものを除去したり、軽減したりするための必要かつ適当な変更、調整である。

加えて、合理的配慮の背景にある法律、学内で整備すべき環境や制度、支援体制、配慮の調整や提供を行う際に特に意識すべきことについても、村田先生ご自身の実務経験を交えて解説いただいた。合理的配慮は、法的枠組みの中で、学修への参加の機会平等達成のために、建設的な対話を通じて提供されるものである。それは、「教育活動における多様な学生支援の中の一部」なのだと言っていた。

また、村田先生は、「障害学生支援に関するノウハウの共有やシステム作りは、学内の『インフラ』的な機能の1つに位置づけられる」とも話されていた。合理的配慮の提供にあたっては、学生と教職員双方の建設的な対話をもとに妥当性を判断し、合意形成に至る必要がある。今回のセミナーは、合理的配慮の考え方に基づく障害学生支援の共通認識を得る貴重な機会となった。参加者からも、「合理的配慮の定義を確認できたので、迷った時に根本的な軸に立ちかえられる」、「合理的配慮をどう提供していけばよいのか、方向性がみえた」といった感想があった。

# 建物のデザインを皆で考える——学内アクセシビリティツアーより

学修アクセシビリティ支援室 田中佑典

2024年5月

2024年1月22日(月)、トロイヤー記念アーツ・サイエンス館(T館)にて、特別学修支援室(現学修アクセシビリティ支援室)主催で、「学内アクセシビリティツアー」を実施した。学生(支援室利用学生も含む)、教職員、T館設計や本館改修に携わる方、合わせて27名が参加し、館内を巡った。

ツアーは、ユニバーサルデザインに注目して巡った。廊下は広く、車椅子や白杖を使用しても移動しやすい。また、教室入口の表示は数字の部分に凹凸がついており、触ってもわかるようになっている。その表示の面積が広がっているため、点字のみの表記と比べて表示を探し出しやすいとの意見があった。

車椅子ユーザーは、T館の入口からエレベーターまでの通路の見通しが良く、位置関係がわかりやすいデザインだと話していた。そのため、他の建物ではレイアウトに慣れて、館内をスムーズに移動できるようにまで時間がかかるが、T館では目的地までの行き方が一見してわかりやすいとのことだった。電動車いすと手動車いすの2台でエレベーター内に乗り入れてみたところ、車椅子同士の間隙にも数名乗り込める余裕があった。

1階のエレベーター側の階段横にある可動式のひな壇は、視覚に障害のある学生にとって、白杖で移動していると階段との区別が付きにくい。もし2階に向かう階段と間違えて昇ってしまうと、頂上から床に転落してしまう恐れがあり危険である。一方で、視覚的なデザイン性が高く、作品の展示や芸術活動の発表を観るための観客席などイベントに活用されている。

また、館内の廊下には、椅子や机が様々な場所にランダムに配置されている。これは、学生同士で授業前後などに気軽にコミュニケーションを取れるように、という意図が込められていると設計担当の方は話されていた。しかし、車椅子や白杖で移動する際には、位置関係がわかりづらかったり、通り道が狭くなってしまい、衝突の危険もあると支援室利用学生は話していた。

この2つは一例ではあるが、建物のアクセシビリティとデザインとの間で、コンフリクトが度々生じる。そのときにどちらを採用し、どちらを棄却するかではなく、アクセシビリティの向上を行いつつ、他の目的も達成できるようなデザインの工夫が求められるだろう。

例えば、教室番号や構造が浮き上がり、凹凸により触って確認できる入口の館内図は、視覚障害のある学生にとってわかりやすく、他の学生にとっても視認性が良いため、他の建物にもあってほしいという声が上がった。

このように、障害の有無に関わらず利用しやすいものにするというユニバーサルデザイ

ンの考え方が、アクセシブルなキャンパスづくりに求められるだろう。



## 「Q サポ」 — 学生同士の学び合いコミュニティ

### 学修・教育センター

2024 年 5 月

2023 年秋学期より学びのための新しいサービス「数量的スキルサポート／Quantitative Skills Support」（通称：Q サポ）がスタートしました。Q サポは数理、情報科学、統計、データサイエンスなどの学修支援を提供する場であり、「共に考え、共に学び合う場」というコンセプトを掲げています。本学の 2021～2025 年度中期計画で挙げられている文理融合、総合的な知を涵養するための学修支援の一環として、文理を問わず、すべての学生に対して、数理・情報科学・統計にかかわる一般教育科目や基礎科目の履修に必要な前提知識や基礎知識の習得をサポートします。

このような学修支援の必要性は、数理・情報系の先生方から声があがり、2013 年頃からその要望が寄せられていました。CTL の運営委員会でもその重要性が話題にあがることもありました。2023 年 6 月から CTL 内で検討を重ね、秋学期と冬学期には、連携科目の担当教員や CTL 運営委員会の先生方との協力のもと、パイロット運用を実施し、その成果により 2024 年度以降の継続が決定しました。T 館（トロイヤー記念アーツ・サイエンス館）の建設や、文科省が推進する数理データサイエンスプログラムへの参加(令和 6 年度申請予定)も Q サポ開設の後押しとなりました。



図 1 オスマー図書館での活動の様子

Q サポでは、学部生ラーニングサポーター（略称：LS）が「一緒に勉強する。学び方を一緒に考える。」という姿勢で対応します。LS は有給学生アルバイトであり、基本的には連携科目を履修済みで、該当科目の教員から推薦を受けた学部生です。学び合うというコンセプトを理解し、Q サポの業務に自主的・主体的に携わっていくことが求められます。LS は、単に問題の答えや解き方を教えるのではなく、前提知識の理解を確認したり、他の問題・学習にも応用

可能な「学ぶ力」を育んだりすることを心がけています。2023 年度冬学期時点で、15 名の LS を採用しています。

現在オスマー図書館 1 階で、月曜日から金曜日のランチタイム、4 限、5 限に予約不要（Walk-in）の形でサポートを行っています。目下、Q サポの課題は知名度を上げ、利用者を増やすことです。そのために、LS は連携科目の授業内で Q サポの宣伝を行ったり、T 館で出張 Q サポを行ったり、マスコットキャラクターを作ったり、試行錯誤しています。

2023 年度冬学期からは、広報チームとコンテンツ制作チームに分かれて、それぞれプロジェクトを企画して行っています。将来的には、より多くの学生が Q サポを利用し、文系理系の背景にとらわれずに学べる環境をつくり、メジャー選択の柔軟性を高めることを目指していきます。



図2 広報の取り組み 授業内広報



図3 Q サポのマスコットキャラクター「Q サポくん」

LS の声：

ラーニング サポーター (LS) 中間アンケートより

LS をやってみて良かった点を教えてください。

1. 様々なバックグラウンドを持った学生と学修支援を通じて交わることで、コミュニケーション能力、ファシリテーション能力を磨くことができる

- 他の LS の方と交流を持てたこと、LS 同士でのコミュニティができた。
- LS が ICU でマイノリティーな理系を今後盛り上げていくきっかけになっていると感じたこと
- 同じ理系でも違う系統の人との繋がりが増えた

2. 学修相談を通じて、自らの学びを深め、教えることを通した学び体験を得ることができ、教育や研究の仕事に進むためにも役立つ経験を積むことができる

- さまざまな分野の質問を受けて、一緒に考えたことによって、自分の理解が深まった。
- 質問にどう答えるか考えていくうちに、どのように教えたら良いかわかるようになってきた
- 数学を諦めそうな方が奮起しているの間近で見て、漠然と「やってよかったな」と思えた。
- 自分の復習になる。どう説明すればわかりやすいのかを考えるきっかけになった。
- 教える際は自分が相手以上に理解していることが必要。質問に答えることで自分の理解も深まった。新しいことをたくさん学べた。

### 3. チームで働くことの大切さと経験を得ることができる

- 自分が一年生のときに欲しかったものを作ることができて非常に嬉しい。
- 一から何かを立ち上げることの大変さ、そのプロセスを学ぶことができた。
- 自分が好きな理学の分野に対して皆が感じる敷居の高さを低くするために働けたことが嬉しい。
- 企画や広報について考える機会が増えた。広報の方法など新規プロジェクト特有の仕事を経験できて面白かった。

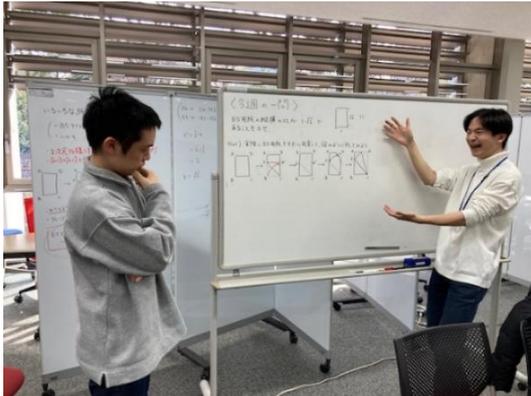


図4 広報の取り組み 今週の一問シリーズQ サポに設置し、インスタにも掲載



図5 広報の取り組み T館に質問掲示板を置きました。

## 秋学期の活動報告 サポート記録

セッション数

# 74

【秋学期 活動期間】

9/13 (水) - 11/14 (火)

サポート日数：43日

分野	連携科目	担当教員
情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ★GEN063 <a href="#">N2: Multimedia Communication Literacy</a></li> <li>• <a href="#">N2: 理解のためのマルチメディア</a></li> </ul>	KABURAGI, Takashi ISHIBASHI, Keisuke
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ISC104 <a href="#">Foundation of Programming</a> プログラミング基礎</li> </ul>	
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>• MTH102 <a href="#">Introduction to Mathematics</a> 数学入門</li> <li>• MTH103 <a href="#">Linear Algebra I</a> 線形代数学 I</li> </ul>	KOBAYASHI, Masato (PTL) SHIMIZU, Yuji
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ECO102 <a href="#">Principles of Microeconomics</a> ミクロ経済学原論</li> </ul>	
経済	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ECO102 <a href="#">Principles of Microeconomics</a> ミクロ経済学原論</li> </ul>	MARSZALEC, Daniel

★文部科学省 数理・データサイエンス・AIプログラム申請科目

図6 秋学期の活動報告

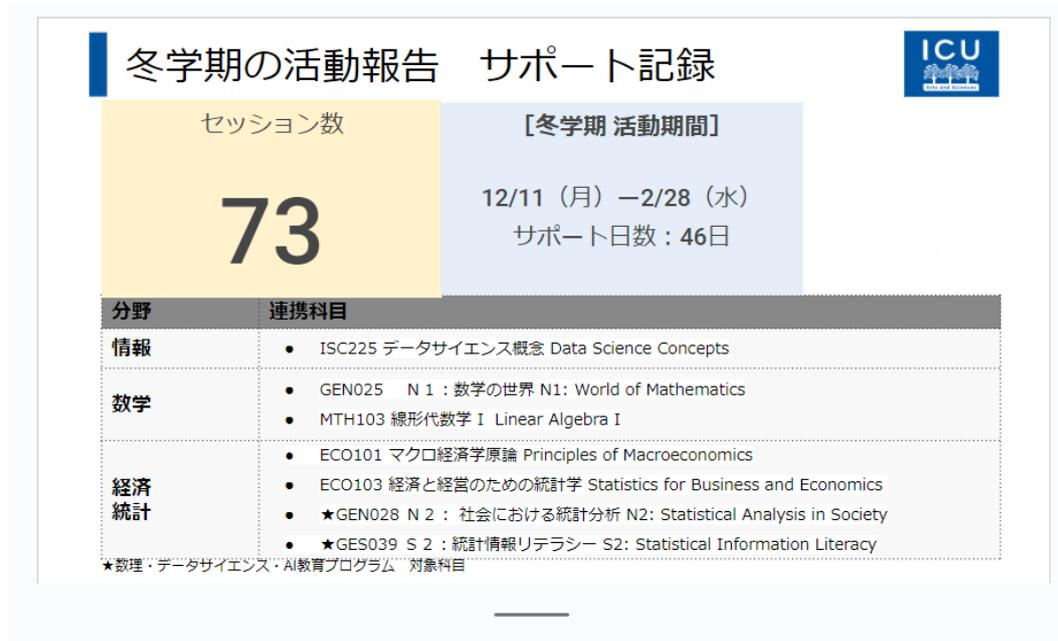


図 7 冬学期の活動報告

利用者の声：

- 様々な角度から問題を考えていただきありがとうございました。
- メンバーのみなさんがとても熱心にお話を聞いてくださったので、レポートの方向性を決められました！
- 分かる範囲で立ち止まって、一歩ずつ教えてくださったので理解が深まりました！！
- 問題の解法だけでなく、理論から丁寧に説明して下さってありがたかったです。
- エラーに対してただ解決するだけではなくどうアプローチするかを学びました。ありがとうございました。
- 私が分かるまで親身になって教えてくれたり、急かさず待っていてくれてありがとう！
- 答えではなくて考え方を学べたので良かったです。ありがとうございました。

## 生成 AI の現状 : 大学教員として知っておきたいこと

学修・教育センター センター長 那須敬

2024 年 10 月

このようなタイトルの記事を書く資格が私にあるのか、自信はありません。毎月 20 ドルを ChatGPT 有料版に支払っているのに、二ヶ月に一回ぐらいしか使っていないからです。使いたいと思う場面がないし、回答できない質問に対して平然と嘘をつくのを見ると、気持ち冷めてしまいます。「Google 検索や Wikipedia が登場したときと同じ。はじめは疑われたけれど、今では誰でも使っている」「否定するだけでは変化に乗り遅れる」という周りの声にも、まだ納得していません。

しかしそんな私とは無関係に、AI ゴールドラッシュは続きます。ChatGPT で生成 AI 技術の先頭に立つ OpenAI 社は、この秋に Microsoft 社などから 66 億ドルの新たな資金を調達し、その時価総額は今年はじめの約 2 倍となる、1,570 億ドル (1 ドル 150 円として約 23 兆 5500 億円) に達したと言われます[1]。AI 処理に使われる GPU チップの 8 割以上のシェアをもつ半導体メーカー NVIDIA 社は、6 月に時価総額が 3 兆 3300 億ドル (約 500 兆円) に達し、一時は Apple、Microsoft を抜いて世界 1 位の企業になりました[2]。このような規模の資本の集中が技術的に何を可能にするのか、私にはわかりません。ですが、社会的に何を意味するかは、想像できます。投資家たちの期待を集める巨大企業が、AI 産業において独占状態を築きつつあること、そして政府も民間も個人も、その影響を受けずにいることが難しくなるということです。人類社会の安全のため AI 研究を一度スローダウンしようと著名な研究者や技術者たちが呼びかけたほんの一年半前の出来事[3]が、もうずっと昔のように感じられます。

AI を「活用」せよ、やり方が分からないならば全力で考えよ、という要請は教育現場にも届いています。アメリカでも日本でも、教員と学生が「AI と共に教える／学ぶ」方法を考えるさまざまなセミナーやワークショップが行われています。シラバスや成績評価ルーブリックの作成を手伝ってまいりましょう！授業用のスライドを作らせましょう！論文のチェックをしてまいりましょう！学生のチューターになってまいりましょう！アイデアは次々に出てきます。しかしこのエッセイでは、大学教育への活用方法を考える前に、生成 AI の現状について 2024 年のあいだに私たち教員が確認しておきたいことがらを論じたいと思います。

### 1. 「ChatGPT は禁止」と言っても、もう通じません

生成 AI はあらゆるソフトウェアや端末の基本的な機能として急速に普及しています。ChatGPT (OpenAI) 、Gemini (Google) [4]、Copilot (Microsoft) 、Llama (Meta) といった大手企業のサービスをはじめ、Claude (Anthropic) 、Perplexity (Perplexity AI) など、有力ベンチャー企業が ChatGPT に引けを取らない生成 AI ツールを実用化していま

す。これまではウェブブラウザ上でユーザーと対話するチャットボット形式が主流でしたが、今後は日常的に使うアプリケーションとの合体（Microsoft 365 Copilot や Gemini for Google Workspace など）、OS との一体化（Copilot in Windows や Apple Intelligence[5] など）、コンピュータ端末への物理的な実装（Copilot+ PC など）が進んでいくでしょう。ICU の学生にも人気のノートアプリ Notion や、文法チェックツール Grammarly にも、オプションで生成 AI 機能をつけることができます[6]。ほかにも何百もの無料アプリやプラグインが流通しています。

このため、AI を使った作業と AI を使わない作業とを区切ることは難しくなるでしょう。わざわざ ChatGPT のような AI ツールのウィンドウやアプリを開かなくても、Google ドキュメントや Word、メール画面やメッセージアプリなど、文書を作成するあらゆるシーンで AI アシスタントを使うことが、現時点で可能です。たとえば教員が指定した Moodle ページ上で回答をタイプさせるような試験で、学生にウィンドウの切り替えを禁止したとしても、AI ツールを使う余地は残ります。日本語を入力するときの漢字変換機能のように、今後は AI を使用せずに文字入力をするもののほうが難しくなると考えてよいでしょう。

## 2. データ資源めぐる競争は続く。著作権問題は未解決

AI 企業は、より多くの資金、技術者、電力[7]、そしてデータを求めて熾烈な競争を繰り広げています。私がもっとも興味深いと思うのは、データ枯渇の問題です。生成 AI ツールの核となる LLM（大規模言語モデル）が出力する回答の質と精度は、トレーニングに使われるテキストデータの量と質に大きく依存するのですが、各社がこのデータ確保に苦心しているという報道が目立ってきました。

初期の LLM のトレーニング用データの大半は、インターネット上で集められたものでした。この中には誰でも見られるウェブページ、Wikipedia 記事、新聞記事やニュースサイト、掲示板のコメントなどが含まれます。しかし、人間のように言語を操ることのできる LLM を作るためには、インターネット上の全テキストデータを集めても足りず、本や雑誌などの出版物を大量に読み込ませる必要がありました。OpenAI の初期の LLM である GPT-3 のトレーニングに使われたテキストデータのうち、16%は出版された本からとったものでした。その数は 35 万 7 千冊にのぼるという主張もあります。『The Atlantic』のアレックス・ライスナーのレポートによれば、Meta 社は Llama のトレーニングのためにさらに 19 万冊近くの本を使用しており、その中には出版されてから 20 年以内の新しい文学作品も多く含まれていました[8]。

問題は、OpenAI も Meta も、これらの本の著作権保有者の同意を得る必要はないと考えていたことです。現在ほどの企業もデータセットの全体像を公表していません。しかし 2023 年末には、『ニューヨーク・タイムズ』紙が OpenAI とその主要な出資者である Microsoft を著作権侵害で提訴して注目を集めました。同紙の「数百万」もの記事が AI トレーニングに無断で使用されていたことを突きとめたためです[9]。使用許可のいない「フェア・ユース」の範囲内である、という OpenAI の主張が法廷で通用するかは、現時点ではわかりません。その一方で OpenAI は、AP 通信、Axel Springer 社、Vox Media 社、

『ファイナンシャル・タイムズ』、『ル・モンド』、『ウォールストリート・ジャーナル』といった大手メディアや出版社とデータ使用に関する契約を次々に結んでいます[10]。著作権で保護されたデータを使わずに AI トレーニングを続けられなくなったことは、明らかです。

大量の登録ユーザーをかかえる企業は、自社製品のユーザーデータを AI トレーニングに使えるようにポリシー変更を行っています。たとえば Google は昨年 7 月のプライバシーポリシー変更で、自社のサービス上で一般公開されたもの（YouTube 動画やブログ、一般公開された Google ドキュメントなどが該当すると考えられます）を Google の AI トレーニングに使用すると明記しました[11]。Meta も、Facebook と Instagram 上の全ユーザーポストを AI トレーニングに使うことを発表しています[12]。私たちが学生のころに投稿した写真や旅行記、新年の抱負も、すべて取り込まれているでしょう。

それほどまでにデータが足りないのならば、疲れを知らない生成 AI に作らせた合成データ（synthetic data）で次世代の AI をトレーニングしてはどうでしょうか？ 妙策のようですが、これをくり返すと出力の質が確実に劣化し、ワンパターン化していくそうです[13]。生成 AI で作られたフェイクニュースやフェイク画像が溢れることで、インターネットに依存した AI トレーニングはますます困難になる、という指摘もあります。

以上から、何が言えるのでしょうか。OpenAI は、人間を上回る能力を持つ完全に自律した（つまり人間の助けを必要としない）「汎用人工知能（Artificial General Intelligence = AGI）」を実現し、「人類全体に利益をもたらす」ことを究極的な目標とする、と公言しています[14]。そのような主張を鵜呑みにすることはできませんが、そのために莫大なお金が動いていることは事実です。そして、この事業を継続するにはあらゆる方法を使って、人間のデータを集めることが必要なのです。

### 3. 言葉は誰のものか

学生たちの学習の場であり研究者たちの仕事場である大学は、人間らしいユニークな可能性に満ちています。これは AI 業界にとっては宝の山です。データ資源をめぐる競争で、いまもっとも求められているのは専門家たちによって注意深く紡ぎ出される、質の高い言葉だからです。では、私たち大学教員・研究者の言葉は誰のものなのでしょう。

今年の夏には、Routledge 出版を傘下にもち 2,700 超の学術雑誌を出版している Taylor & Francis 社が、Microsoft の AI 開発にコンテンツを提供する契約を結び、論文や研究書の著者でありながらこの契約について何も知らされていなかった人びとの中から批判の声があがりました[15]。このような騒ぎはしばらく続くでしょう。生成 AI の開発元と出版社がデータ使用に関する契約を結ぶときに、著作権保持者たちに選択肢が与えられることはほとんどないからです（オプト・アウトする権利を主張することはできますが、トレーニングデータを検証することは不可能です）。

生成 AI と著作権の関係に関しては、基準の厳しい欧米と比べて、日本の空気はずいぶん呑気に感じます。6 月に日本政府の有識者検討会は「AI に原作のデータを学習させるだけでは、原則、権利の侵害にはあたらず、使用許可をとる必要はない」という考えをまと

めています[16]。これには驚きました。このことと、内閣府が 100 億円の予算を確保して推進しようとしている、学術論文や研究データのオープン・アクセス化事業との間に何か関係があるのか、偶然なのかは知りません。しかし実現したら、AI 業界にとっては嬉しいプレゼントになるでしょう。

自分の論文も研究ノートも、蔵書もメールも、すべて共有して AI に学習させればよいではないか、と言う人もいるかも知れません。どちらかと言えば、私は嫌です。しかし、仮に私たち全員がその通りにしても、それで AGI が実現するとは私には考えられません。AI が学習しきれないものを人間はもっているはずだからです。それはまだ文字化されていない言葉、舌にのぼらない言葉、言葉になる前の言葉です。これを思考とかマインドと呼んでもいいでしょう。大学は、私たちのそのような言葉でつながる共同体であり続けてほしいと思っています。

[1]「オープン AI、66 億ドルを調達—企業価値 1570 億ドルと評価」*Bloomberg*, 2024 年 10 月 3 日, <https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2024-10-02/SKQLL4T1UM0W00>.

[2]「半導体大手 エヌビディア 時価総額 3 兆 3300 億ドル余 世界 1 位に」*NHK News Web*, 2024 年 6 月 19 日, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240619/k10014485341000.html>. 2024 年 9 月 23 日現在は世界 3 位。

[3]“Pause Giant AI Experiments: An Open Letter”, 22 March, 2023. <https://futureoflife.org/open-letter/pause-giant-ai-experiments/>.

[4]Gemini は、現在 ICU が契約している Google Workspace for Education 上で使用可能。

[5]この原稿執筆時点で未公開。英語ベータ版が 2024 年秋、日本語対応は 2025 年以降と発表されている。

[6]Grammarly AI は、現時点では ICU が契約しているアカウントでは使用不可。ICU アドレスとは別に無料アカウントを作れば可能。

[7]“AI Is Already Wreaking Havoc on Global Power Systems”, *Bloomberg*, June 22, 2024, <https://www.bloomberg.com/graphics/2024-ai-data-centers-power-grids/>.

[8]Cecilia Kang, Cade Metz and Stuart A. Thompson, “Four Takeaways on the Race to Amass Data for A.I.,” *The New York Times*, April 6, 2024, <https://www.nytimes.com/2024/04/06/technology/ai-data-tech-takeaways.html>; Emily St. Martin, “Bestselling Authors Mona Awad and Paul Tremblay Sue OpenAI Over Copyright Infringement”, *Los Angeles Times*, July 1, 2023, <https://www.latimes.com/entertainment-arts/books/story/2023-07-01/mona-awad-paul-tremblay-sue-openai-claiming-copyright-infringement-chatgpt>; Alex Reisner, “Revealed: The Authors Whose Pirated Books Are Powering Generative AI,” *The Atlantic*, August 19, 2023, <https://www.theatlantic.com/technology/archive/2023/08/books3-ai-meta-llama-pirated-books/675063>.

[9]Michael M. Grynbaum and Ryan Mac, “The Times Sues OpenAI and Microsoft Over A.I. Use of Copyrighted Work”, *The New York Times*, December 27, 2023, <https://www.nytimes.com/2023/12/27/business/media/new-york-times-open-ai-microsoft-lawsuit.html>.

[10]フェリックス・サイモン「新聞記事使う AI 企業、「対価」は妥当か 24 年の契約 19 件に」*NIKKEI Digital Governance*, 2024 年 9 月 19 日。

[11]Mariella Moon, “Google’s Updated Privacy Policy States It Can Use Public Data to Train Its AI Models”, *Engadget*, July 4, 2023, <https://www.engadget.com/googles-updated-privacy-policy-states-it-can-use-public-data-to-train-its-ai-models-095541684.html>. 該当箇所の最新バージョン (2024 年 9 月 16 日)

は以下。「たとえば、インターネットに一般公開されている情報やその他の公開情報源からの情報を収集し、Google の AI モデルのトレーニングのほか、Google 翻訳、Gemini アプリ、Cloud の AI 機能などのサービスや機能の構築に役立てることがあります。」 <https://policies.google.com/privacy#footnote-sources>. 現時点で、ICU が機関契約している Google Workspace for Education と Microsoft 365 Education では、ユーザーのデータは AI トレーニングに使われないと説明されている。

[12]Morgan Meaker, 「わたしの思い出はメタの“AI 訓練データ”になる」 *WIRED*, June 27, 2024. <https://wired.jp/article/my-memories-are-just-meta-training-data-now/>. メタのプライバシーポリシーは以下。 Meta 「生成 AI のモデルと機能に関連する、Meta による情報の使用」 <https://www.facebook.com/privacy/genai/>.

[13]Aatish Bhatia, “When A.I.’s Output Is a Threat to A.I. Itself”, *The New York Times*, August 25, 2024, <https://www.nytimes.com/interactive/2024/08/26/upshot/ai-synthetic-data.html>.

[14]Sam Altman, “Planning for AGI and beyond”, Open AI, February 24, 2023, <https://openai.com/index/planning-for-agi-and-beyond>.

[15]「Taylor & Francis 社、AI 活用に向けた提携の一環として同社のコンテンツやデータへのアクセスを Microsoft 社に提供（記事紹介）」 *Current Awareness Portal*, 2024 年 8 月 23 日, <https://current.ndl.go.jp/car/224458>.

[16]「生成 AI 著作権など保護のあり方 考え方まとめる 政府の検討会」 *NHK News Web*, 2024 年 6 月 3 日, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240603/k10014469141000.html>. Cf. Dan Milmo, ‘Google Says UK Risks Being ‘Left Behind’ In AI Race Without More Data Centres’, *The Guardian*, September 19, 2024, <https://www.theguardian.com/technology/2024/sep/19/google-says-uk-risks-being-left-behind-in-ai-race-without-more-data-centres>.

## 数学と人工知能

自然科学デパートメント 松村朝雄

2024年10月

### 真に未解決の数学の問題を AI が解決に導く未来は来るのか？

本原稿を書こうとしていた時に、興味深いニュースが入ってきた。DeepMind が開発した人工知能が、今年 7 月に行われた国際数学オリンピック(IMO)において、銀メダル相当の成績を収めたという<sup>1</sup>。DeepMind は囲碁に特化した人工知能 AlphaGo を開発し、それが 2016 年に 9 段の囲碁棋士イ・セドルに 5 局勝負で勝利を収めたことで有名だ。

今回 IMO には、二種類のプログラム AlphaGeometry2 と AlphaProof が挑戦した。IMO の問題 6 問中、前者が 1 つの幾何学の問題を、後者が 2 つの代数学の問題と 1 つの数論の問題を解いた。解けなかった残りの 1 つは組み合わせ論の問題だそうだ。

ChatGPT などの大規模言語モデルは、人間のよう自然に言語を繰り出すことはできても、論理的に物事を精査する、いわゆる「数学的推論」は苦手である。そのため、IMO の問題を解くためには、AlphaGo がそうであったように、特定のアルゴリズムや模範解答例を反復する強化学習が必要だ。AlphaGeometry2 や AlphaProof は、それぞれの分野の強化学習をした生成 AI といえる。

人工知能数学オリンピック(AIMO)というのも開催されていて、そちらの方では、今年には Numina という研究者チームが受賞した。Nature の記事によると、彼らは言語モデルのみを使って IMO の問題より単純化された問題を解いたが、それ以上に複雑な問題は強化学習なしでは難しいそうだ<sup>2</sup>。

**人が数学の問題を解くプロセスの創造性には、直感と論理が深く絡み合っている。**それは、視覚や聴覚では捉えきれず、また言葉で表現することも難しい。人工知能による数学への挑戦は、その仕組みを明らかにしていくことである。私は、その側面こそが最も興味深いと思う。

### 数学とは何か

MathOverflow という数学の Q&A サイトに、ある学生らしき人が「自分みたいな人が数学にどのように貢献できるのだろうか」<sup>3</sup>という切実な質問を書き込んだ。2010 年 10 月のことだ。1983 年にフィールズ賞を受賞したアメリカの数学者 William Thurston のそれへの真摯な返答が秀逸なので引用する。

「数学に貢献する必要があるのではありません。もっと深いものです。あなたが数学を追求することで、どのように人類に、さらには、世界の幸福に貢献できるでしょうか？」

[筆者訳]<sup>4</sup>

この冒頭から始まる返答の中で、Thurston は、それぞれの人の頭の中にある数学の理解と、正しく共有するために記述された数学との間には、乗り越えがたい差異があることを率直に述べている。

その上で、「数学は、その理解を広げ、新旧のアイデアに命を吹き込む数学者たちの生きたコミュニティーの中にしか存在しない[筆者訳]」と述べる。言い換えれば、あなたが数学をより多様に理解することが、人類にとっての価値になるというのだ。

## 数学教育の挑戦

数学的不安という心理学用語がある。数学に関連したタスクに直面した時に感じる緊張、不安、恐怖などの感情で、数学のパフォーマンスを妨げると言われている。

その主な要因としては、限られた時間内で早く答えを出すことがよしとされるテスト重視の数学教育や、「数学の苦手な人が存在する」という社会的信念・ステレオタイプがあげられる。これらが、数学に関する自己認知や自己肯定感に負の影響を与えるのだ。後者については、「女性は数学が苦手」という偏見も広く存在し、ジェンダーギャップにも影響する。社会的に極めて根深い問題だ。

数学不安が強いと、数学に関連する授業やタスクを回避する傾向がある。私が一般教育科目で教えている「数学の世界」で 2021 年に行ったアンケートでは、履修者 150 人のおよそ半数が、過去 2 年間、数学にまったく触れていなかった。長い間、運動をしていなければ、筋力は落ちてしまうし、無理をすれば怪我をする。数学も 2 年のブランクの後に始める時には、リハビリのようなものが必要だろう。

数学者ダヴィッド・ベシスは、一般向けに書いた最近の著書で、「数学が身体活動」であり、「数学には「学ぶこと」ではなく、あるのは「やること」だ」と著者は言う<sup>5</sup>。体の使い方を習得するためには、動かし方を知識として知っているだけでは不十分で、その動作を繰り返す練習が必要だ。数学もそれに近いというのだ。

私はその点に ICU の教育の伸び代があるのではないかと楽観的に考えている。既存の数学のイメージを払拭するような学びが提示できれば、ICU のリベラルアーツのスペクトラムはぐっと広がるだろう。

<sup>1</sup> Davide Castelvechi, “DeepMind Hits Milestone in Solving Maths Problems: AI’s Next Grand Challenge,” *Nature*, July 25, 2024, <https://www.nature.com/articles/d41586-024-02441-2>.

<sup>2</sup> Castelvechi, “DeepMind Hits Milestone.”

<sup>3</sup> muad, “What’s a mathematician to do?” MathOverflow, posted October 26, 2010, <https://mathoverflow.net/questions/43690/whats-a-mathematician-to-do/44213#44213>.

<sup>4</sup> Bill Thurston, reply to “What’s a mathematician to do?” MathOverflow, March 28, 2010, <https://mathoverflow.net/questions/43690/whats-a-mathematician-to-do/44213#44213>. It is essentially based on his earlier essay published in 1994. William B. Thurston, “On Proof and Progress in Mathematics,” *Bulletin of the American Mathematical Society* 30, no. 2 (1994): 161–77, <https://arxiv.org/pdf/math/9404236>.

<sup>5</sup> ダヴィッド・ベシス (著), 野村真依子 (翻訳), *ここを旅する数学: 直観と好奇心がひらく秘密の世界*, 晶

文社 (2023/3/24), p.31, Originally published in French as *Mathematica: Une aventure au cœur de nous-mêmes* (Éditions du Seuil, 2022).

# 日本語教育と生成 AI

## 日本語教育プログラム 小澤伊久美

2024 年 10 月

### 1. はじめに

生成 AI の技術が発展し、普及していく際の社会の反応をみていると、学部時代に読んだ本の一節が思い浮かびます。

今日、コンピューターに対して世間でよくなされている反論と本質的にはおなじ議論が、プラトンによって『パイドロス』(274-7)と『第七書簡』の中で、書くことに対してなされているということを知ると、たいていの人びとは驚き、多くの人びとは当惑する。プラトンは、『パイドロス』のなかでソクラテスにこう言わせている。(中略)書くことは記憶を破壊する。書かれたものを使う人間は、[精神の]内的な手段としてもっていなければならないものをもたず、そのかわりに外的な手段にたよるために、忘れっぽくなる。書くことは精神を弱める、と。今日でも、かけ算の九九の表の記憶が[精神の]内的な手段にならなければならないのに、電卓がそのかわりに外的な手段を提供してしまうことを、親やその他の人びとは恐れている。電卓は、精神を弱める、つまり、精神から、精神の強さを保っておくはずの仕事を取り去るのである。

(Walter J. Ong. (1982) . *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. Routledge, p.79. 邦訳『声の文化と文字の文化』桜井直文 他訳、藤原書店、1991 年、pp.167-168)

本書でオングは、書くこと、印刷、コンピューターなど、ことばを技術化する technologize the word 方法が人びとの思考にいかにか影響を与えているかを論じていますが、生成 AI の出現も新たな「ことばの技術化」であると私は感じています。「書く」ことはプラトンの時代では外的でなじみのない技術であったことが上記からわかりますが、私たちには「書く」ことは深く内面化されていて、そのようには受け止めにくいように、近い将来、生成 AI と私たちの思考の関係も変わるのだらうと思います。

その時に、学問をするということ、考えるということの質がどう変わるのか、また、ことばを学ぶ・習得するということの質がどう変わるのか、ICU で日本語を教える一人として私は強い関心を持っています。

### 2. 日本語教育プログラム (JLP) の教員の声

2024 年 6 月に日本語教育プログラム (JLP) の常勤・非常勤の教員に、生成 AI に関するアンケートを取ったところ、回答率は約 50%でしたが、生成 AI を授業で利用している教員は 2 名のみでした。具体的には、論文執筆指導時の利用 (実際に学生に使わせる中で問

題点を含めて考えさせる、生成 AI に書かせたレポートを読ませて問題点を考える）、例文作成や翻訳に利用させてその精度について検討させる、単語リスト作成や問題見直しの補助など教師の授業準備に使うといったことが挙げられました。

一方で、学期中は忙しくて最近の動向などを把握できていないように思うので利用経験のある方に利点や問題点を聞くなど気軽に情報交換できる場があるとうれしいという声も多く寄せられました。具体的な不安としては以下のようなものがありました。

- 楽をするためではなく自律した学習のために使うなど学生に適切な利用法を指導できないという不安がある。
- 教員によって利用の許容範囲が異なっていたり、情報やスキルに差があったりして、学生や世の中の実情にあった授業での活用ができるか心配である。
- 学習者のニーズと日本語教育がどんどん離れていっているのではないかと不安である。
- 不正が見抜けな懸念、学習評価への影響が懸念される。しかし今後、発売されるスマホやタブレットでは生成 AI は標準装備との話もあり、学生に対する使用についての規制にも限界を感じる。
- これからは生成 AI が使えることが求められていく社会になると思うが大学での教育がそれに合うものになるのか（活用できるかという側面と批判的に向き合えるかということの両方を大学時代に学ぶ環境が作れるか）見えないという懸念がある。

このアンケートをきっかけに学期末に気軽な情報交換の場を設けました。普段使ったことのない方にも著作権フリーの画像が簡単に生成できることを体験していただいたり、2024年5月にアップデートされた Chat GPT4o のデモ動画で音声や画像の処理が非常に進んだことを見ていただいたり、生成 AI の発展で著作権侵害や社会的バイアスが助長されるといった問題などについても話す時間となりました。また、基本的な情報や、生成 AI と教育（特に語学）について発信の多い研究者を紹介した資料を後日共有しました。

### 3. 2024 年夏現在、ICU の教員の一人として思うこと

生成 AI についていろいろな議論がありますが、それを見聞きするだけでは是非を判断するのではなく、まずは教師自身も使ってみることをお勧めしたいと思います。生成 AI を使用してどのようなことができるかが多少なりともわかると検討すべきことが思い浮かぶからです。それに、これからは生成 AI を利用するのが当たり前の社会になっていくはずです。大学で学生が経験する生成 AI 利用の制限あるいは活用が、実社会での体験と大きく乖離しないように教員は留意する必要があると思います。

また、技術の発展が想像以上に早いため、情報のアップデートは本当に重要です。例えば、昨春は生成 AI の応答が早すぎることで利用者側の考える力を損なうのではないかと懸念されていたのですが、今は最後まで答えを出さない形で応答する生成 AI も登場し、生成 AI の利用が思考力を損なうとは一概には言えなくなりました。一方で、応答が止まりすぎると生成 AI を利用するのが面倒になり、結果として技術の進歩についていけない人が増え

ると懸念する向きもあります。現在は特長の異なる生成 AI が多数登場しているため、目的に合わせてツールや使用法の取捨選択をすることがより重要になってきたと言えるでしょう。

情報収集は一人でしょうと頑張らず、詳しい人の動向を追いかけたり、気軽に聞ける仲間を作っておくとよいと思います。私自身は、教育利用全体については東京大学の吉田墨先生、語学の授業での活用については京都大学の柳瀬陽介先生（英語教育）、大阪公立大学の清原文代先生（中国語教育）、ライティング評価への活用については関西大学の水本篤先生などの発信される情報を見えています。

そのような中で、考えたことをいくつか共有したいと思います。

多くの教師が気になるのは学生の生成 AI の不正使用をいかに防止するかでしょう。昨春は生成 AI が作成した成果物か否かを判断するいろいろなツールが出回りましたが、正確に判定するのは難しいことが指摘され、現在ではそのようなツールの利用は得策ではないと言われるようになりました。そうしたツールの利用を考えるよりも、教師はまず、自分の出した課題に取り組む際に生成 AI を利用すると、どのような不正がどの程度できるか試してみ、学生の不正について予想を立てるとよいと思います。

例えば、レポートやコメントの代筆については、生成 AI に指示を出す文章、つまり、プロンプトで成果物の出来が大きく変わることを知る、というのが一例です。ごく簡単なプロンプトのパターンを以下に書きましたが、数字が大きくなるにつれて、成果物の出来が向上することを実際に体験してみるとよいと思います。

1. 「xxx についてレポートを書いて」程度の単純なプロンプトを与える。
2. 生成 AI に、どのような役割で対応するか、どのような観点から分析し応答するか、どのような形で出力について具体的に指示するプロンプトを与える。
  - a. 役割「あなたはベテランの日本語教師です」
  - b. 観点「xxx が評価のループリックです、この観点から分析してコメントして」
  - c. 出力方式「分析結果と、問題点への改善策を、xxxx という形式の表にして。また、その改善策を踏まえて、先ほどのレポートを書き直して」
3. 分析や対応の際に生成 AI が使える素材を提供するプロンプトを与える。
  - a. 出力したものを受け取る人（教師）がどのような人物か（好みや考え方など）
  - b. 出力するのに入れる自分（学生）自身のエピソード

また、プロンプトが同じでもどの生成 AI を使うのか、どのモデルのバージョンを使うのかで出力が変わりますし、同じ生成 AI の同じモデルを使っても、出力させるたびに異なった回答を出すということも経験しておくことで学生の使用方法についての想定が広がります。

このように試していった結果、教育の在り方を大きく見直すべきだという意見も出てきています。つまり、生成 AI の不正使用を防止するのに躍起になるのではなく、生成 AI の活用が進む時代でも取り組む意義のある学習課題は何か、そもそも何を学ぶべきかを捉え直すという意見です。私自身もそう考えています。この考えを日本語教育について当て

はめると、日本語を学ぶ過程で生成 AI を活用していても、それによって日本語力が向上しているならば悪くないと考え、最終的に日本語の力がつくような課題の在り方、評価の在り方を模索するということになります。

そのためにも教師が生成 AI を活用することが必要だと考えています。様々な活用法が考えられますが、例えば、生成 AI のハルシネーションの問題や、出力の精度がまだ高いことを学生に体験させることを目的とし、授業に次のような活動を組み込んでみるのはいかがでしょうか。

1. 生成 AI の出力した例文や翻訳などの相違や適否を分析させる
2. 生成 AI が作成したレポートを読んで問題点や改善点を指摘させる
3. 学生自身が書いた作文・レポートを、生成 AI を使って改善させる
4. 生成 AI を題材に取り上げ（例：[日経取材記事「氾濫する生成 AI アニメ 9 万枚調査から見えた権利侵害」](#)（『日本経済新聞』2024 年 6 月 6 日公開）など）、様々な角度から功罪を議論する

生成 AI の出力の適不適を判断するには、利用する学生の側にそれなりの語学力が必要だと学生に実感させることが、生成 AI に頼り過ぎない態度を育てる上で重要だと思います。また、学生の中に既にかなり情報格差がありますので、授業で取り上げて議論することで問題点や可能性の理解が深まるだけでなく、そうした情報格差をなくしていくことも大事ではないかと考えています。

教師は授業準備に生成 AI を活用することもできるでしょう。語学科目であれば、次のようなことから取り入れてみてもよいと思います。

- 著作権フリーの画像生成
- 多読用の文章作成
- 単語リスト作成
- 教材や課題の見直し（例：指示文のわかりにくさがないかなど確認）
- 多肢選択の素案作成（大量の仕事でも嫌がらないのが人間との違い）

[MagicSchool.ai](#) のように、カリキュラム作成や推薦状執筆などに使えるツールも出てきました。カリキュラム案やルーブリックの案などが次々と出力されて便利な一方、これに頼ってしまうと教師が授業について考える判断力やデザイン力が低下しないのか心配にもなります。冒頭に挙げたオングの指摘を踏まえると、教師の授業力とは何かも今後変わっていくのかもしれませんが、この点について注意深く観察し、考えていきたいと感じています。

また、研究論文のアブストラクト作成や校正に生成 AI を利用する研究者も各国で増えてきたようです。校閲サービスでも生成 AI と人間の組み合わせでサービスを提供するように

なりましたし、この一年で教育産業でも多くのアプリなどが提供されるようになりました。

ビジネスパーソン向けにも生成 AI の活用について多くの情報が発信されていますので、自分が今、学生だったら、社会人になりたてだったらと思ってそのような情報を入手し、授業以外の仕事について、例えば以下のような形で使ってみるのもよいと思います。

- 誤字脱字チェックなどをする
- コード（プログラム）を書いたり、バグを指摘させたりする
- Brainstorming（いわゆる「壁打ち」）

#### 4. 最後に

今後、語学教育でも、生成 AI と人間の教師の棲み分けやコラボレーションが進んでいくだろうと思います。現状では、英語よりも日本語は成果物の精度が高くないこともあり、人間の教師のほうが学生一人ひとりの学びをより効率的に促すのではないかと感じています。実証できるデータはありませんが、学生に使わせる場合には、生成 AI が出してきた出力の適不適を学生自身が判断できる難易度の課題に留めるほうが言語習得に向くだろうと感じています。

教師個人が情報を網羅することはできませんし、さまざまな角度での検討が必要な問題だと思しますので、本学でも引き続き情報共有と意見交換の場があるとうれしいです。

## 「あなたみたいな人は、毎年一人か二人くらいです」ICUのアドヴァイザー制度について考える

学修・教育センター センター長 那須敬

2025年3月

2024年2月、アメリカにおけるアカデミック・アドヴァイジングの歴史と現状に関心をもって私は、合衆国最大のアドヴァイジング専門職団体である NACADA のコンファレンスに参加し、続いてカリフォルニア州クレアモントに位置するリベラルアーツ大学の名門、ポモナ・カレッジを訪れる機会を与えられました。二つの対照的な経験を通して、ICUのアドヴァイザー制度について考えたことを書きたいと思います。

NACADA は一年を通して様々なコンファレンスやワークショップを行っていますが、私が参加した Administrators' Institute (2月5-7日、Raleigh, North Carolinaにて)には、州立大学や私立大学、コミュニティ・カレッジなどでアドヴァイジング部門に責任をもつディレクターたちが220名近く集っていました。大半はプロのアドヴァイザーか、アドヴァイジングを研究するアカデミックスでした。教員全員がアドヴァイザーをつとめる大学から来た、本人もファカルティメンバーである私のような参加者はいないのか、と主催者に尋ねてみると、「あなたみたいな人は、毎年一人か二人くらいですね」という返事。アメリカのほとんどの大学では教員によるアカデミック・アドヴァイジングは行われておらず、専門のオフィスに任されているという現状を、恥ずかしいことに私はよく理解していなかったのです。たとえば Purdue University の College of Liberal Arts では、約2,500人の在学生のアドヴァイジングを2名のディレクターと14名の professional advisors がすべて行っていました。一人あたり約150人のアドヴァイジーを受け持つという計算ですが、他の大学ではもっと多いと聞きました。

コンファレンスでは、学生支援の実践からアドヴァイジング・オフィスの組織化、そして政権交代後のいま次々と廃止されている DEI (Diversity, Equity, and Inclusion) の保障など、様々なテーマについて講演やディスカッションが行われました。しかし私がとくに興味深いと思ったのは、組織的なアカデミック・アドヴァイジングの有効性を大学の経営陣に対してもっとアピールしていこうという議論でした。大規模大学では、学生の在籍率 (student retention rate) を上げること、すなわち学生を大学につなぎとめておくことが、大学の経営を左右するからです。教員によるアドヴァイジングを行わないのも、まさにこの理由からでした。研究や授業で忙しく、アドヴァイジングへの関心が薄い教員たちに任せるよりも、専門のオフィスを設置したほうが確実に学生支援ができる、というわけです。コンファレンスでは、大学運営側も教員もアドヴァイジングの何たるかを分かっていない、従って我々が啓蒙しなければならない、という趣旨の発言を一度ならず耳にしました。参加者の学生支援への熱い思いに感銘を受けた一方、教員アドヴァイジングに対する期待の

低さに少し寂しい気持ちになったのも確かです。

ICU には学生サービスグループや CTL をはじめとする様々なオフィスで日々の学生支援に携わる経験豊富なスタッフがいますが、全学生の相談役としてアカデミック・アドヴァイジングの大きな比重を占めているのは教員です。そういう大学はアメリカにはもうないのだろうか？そう感じた NACADA の大会から 2 日後に訪問したポモナ・カレッジは、また別世界でした。

約 1,800 人の学生を約 200 人の専任教員で教えるポモナは、アドヴァイジングを行うオフィスは置かず、全教員がアドヴァイザーをつとめています。履修登録の完了前に面談を行うこと、入学してくる学生の学問的関心に合わせて教員アドヴァイザーをあてがわないこと、教員アドヴァイザーとは別にメジャー・アドヴァイザーを設定していることも、ICU と似ていて親近感を感じました。「このような大学で働くならば、学生たちと時間を過ごすのは当たり前です」と、副学部長のピエランジェロ・デ・パセ教授は語ります。教員ひとりに対する学生数がたいへん少なく、学生も教員も互いの顔と名前を覚えてしまうという徹底した少人数教育の理想が、アドヴァイザー制度にそのまま表現されていると言えるでしょう。ICU のアドヴァイザー制度がこのようなりベラルアーツ・カレッジの伝統の中にあっただことが分かり、心強く感じました。

ICU は、日本でもっとも古くからアカデミック・アドヴァイジングに取り組んでいる大学です。ICU のアドヴァイザー制度のはじまりは、NACADA 発足（1977 年）よりも古く、献学（1953 年）時にさかのぼります。[ICU アーカイブズ](#)が保存する『国際基督教学園』案内（1952 年）は、「学生の人格を尊重し、学習、生活、職業及び人間関係等に関し補導制度を整備し、適切なる個人的ガイダンスを与える」とうたっています。

さらに開学 2 年目に発行された『学生ハンドブック』（1954 年）には、アドバイザーの役割と学生にとっての意味が説明されています。

「ICU に於いては学部長より各学生に対してアドバイザー（指導教授）が指定される。アドバイザーは定期的に学生と面談する機会をつくり学生の相談に応じ、学期毎に学籍簿に署名し、学修過程の計画に対して助言を与える。学生はこの定期的な機会を待たず常に自由にアドバイザーに面会を求め各自の学修上の問題・一身上の問題等何事に拘わらず遠慮なく相談する事が望しい」（1954-1955 年『国際基督教大学 学生ハンドブック』）

今から 70 年前に書かれたこの文章は注目に値します。履修登録のための定期面談の目的がはじめから明確であるだけでなく、学生の方から積極的にアドヴァイザーに相談することが進められている点が、現行のハンドブックの文章とそっくりだからです。ICU ehandbook（英語ページ）の「アドヴァイザー制度」の説明文、とくに下線部をご覧ください。

ICU employs an advisor system in which all students are assigned faculty advisors. In

general, this faculty member will continue to serve as a student's academic advisor until the end of his/her third year. Since ICU students are asked to be largely independent in the completion of their coursework on their way towards graduation, you are encouraged to meet with your advisor as often as necessary to receive his/her input regarding such topics as grades and coursework. Since advisors also offer support for students having issues in other areas, such as student life, job hunting or seeking advanced degrees, it is our hope that you will make ample use of this system.

下線部のくだり、「学生は、卒業に向けて自主的に学修を進めることが求められているので、頻繁にアドバイザーと面談し、成績や課題といったトピックについて、助言を受けることを勧めます」の一文（奇妙なことに、現時点で日本語ページには反映されていません）は、実は見過ごされやすいICUのアドヴァイジングについての考え方を端的に表しているように思います。というのも、頻繁にアドバイザーと会って助言を受けることは、「independent 自主的」であることの真逆のように受けとめられやすいからです。実際、アドバイザー制度について話すと、「学生の面倒を見すぎ」「甘やかしている」といった意見を聞くことがあります。しかし、アドヴァイジングのねらいは、自立した一個人として教員と対話することを学生に促すところにあります。学生の希望メジャーと関係なくアカデミック・アドバイザーをあてがうのも、同じ理由からでしょう。アドバイザーは、アドヴァイジーにとっての「指導教官」ではないし、アドヴァイジーはアドバイザーの「門下生」ではないからです。むしろ、自分の学びについて専門の異なる大学教員に説明する経験を通して、学生が自分の言葉で目標をとらえ、意志決定することを励ませばよいのです。CTLに関わることで私自身が学んだのは、アドバイザーの仕事は、学生に手取り足取り何かを教えることよりも、一人の話し相手として学生に聞くことのほうが大きい、ということです。

現在のICUのアドヴァイジングは、少人数リベラルアーツ大学の伝統から生まれた教員アドヴァイジングに、NACADAが提唱する組織的なアドヴァイジングのメリットを組み合わせた形をとっていると言えるでしょう（本号の村上さんの記事もご覧ください）。とはいえ、ICUのアドバイザー制度の歴史には、まだ分からないことがあります。たとえば、1960年代後半の学生紛争とその直後、アドバイザー制度はどのように機能した（あるいはしなかった）のでしょうか？興味は尽きませんが、このあたりで止めます。

# 学生の自発的学修を促す多様なアドヴァイジング 2023 年度の APS、IBS の利用状況とケーススタディーより

学修・教育センター 村上絢香

2025 年 3 月

## 1.はじめに

学修・教育センターでは、学部生の履修やメジャー選択など、学びに関する幅広い相談に応じる、アカデミックプランニングサポート(以下 APS)を行なっています。ここでは、ディプロマポリシーに掲げられている「学問の基礎を固め、自発的学修者として主体的に計画を立てつつ、創造的に学んでいく能力」をサポートする役割を担っており、最終的には学生自身の学業の目標、人生の目標、キャリアの目標、夢をかなえるための手助けをしています。

これに加え、学生アドバイザーの ICU Brothers and Sisters (以下 IBS) は「学生目線」でのアドヴァイジングを行なっています。

本記事では 2023 年度の APS と IBS のアドヴァイジング実績や相談例を紹介し、今後アカデミックアドヴァイジングで教員の皆さんが学生にこれらのサポートを安心して紹介できるようにすることを目指しています。

## 2.APS の 2023 年度利用状況および相談内容

### a. 概要

APS は 2 名の職員が担当しており、完全予約制の面談を学期内外問わず平日 3 枠 (3 限、4 限、5 限) を設けて実施しています。履修相談をするにあたり、常に情報とスキルをアップデートするよう努めています。アドヴァイジングの専門知識は、NACADA<sup>1</sup> の e-tutorial や年次大会、日本アカデミックアドヴァイジング協会 (JAAA) 年次大会や研修会で収集。ICU に特化した知識は、学生向け説明会への参加、部署間での情報交換を通して得ています。さらに、毎月学内の学生対応をする部署が集って学生の様子を情報共有する「学生の健康を考える会」にも参加しています。

2023 年度に行なった APS の面談は 169 件、相談件数が最も多い学年は 4 年生以上でした。例年上級生の相談件数が多く、4 年生以上の相談は対応件数の 50.3% を占めていました。それに伴い相談内容も「卒業要件」や「将来・進路」が多いです。また、休学や成績不良などの理由で 4 年以上在籍する学生からは卒業までの見通しを確認したいという相談が寄せられます。これらの相談は友人や同級生には相談しにくい内容であることから、学生である IBS より職員との面談を選択する傾向があると考えられます。さらに複数プログラムの両立に関する相談も多く、留学や教職課程、サービス・ラーニング、学芸員課程など ICU が提供する様々なプログラムを 4 年間の大学生活に組み込むための現実的な履修計

面の相談にも対応しています。

こちらは昨年度の APS の面談で話題となった相談内容一覧です。（図 1 参照）

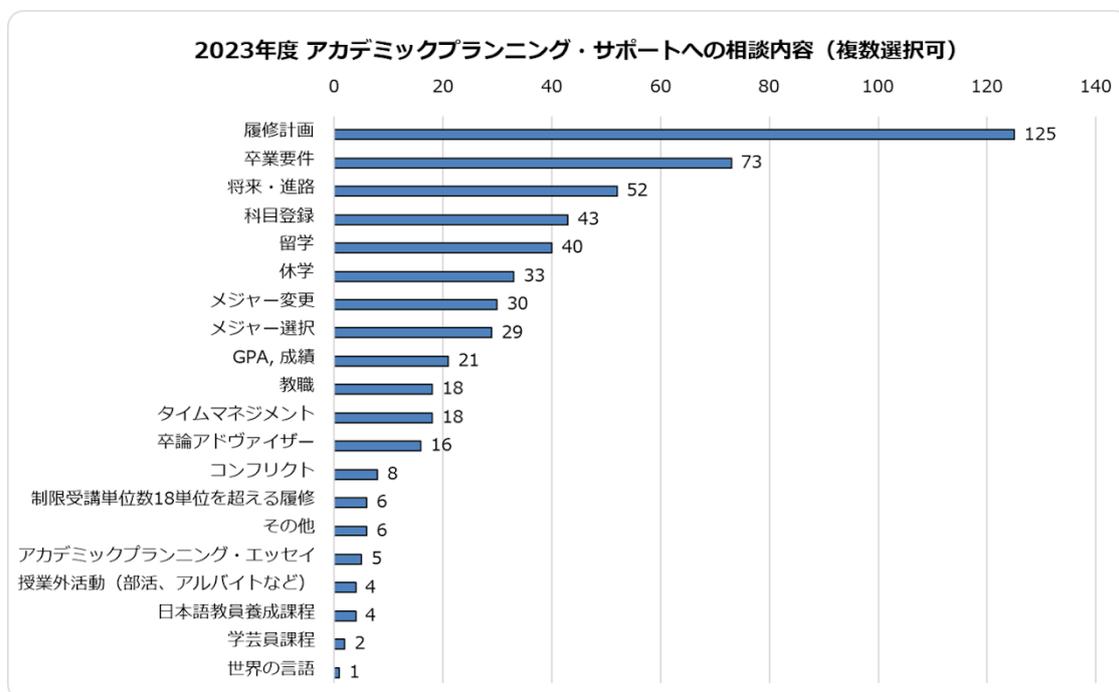


図 1 2023 年度 APS への相談内容

相談内容の上位 3 つの質問例と APS の対応を紹介します。

#### ①履修計画

- **休学したことで、履修計画が他の学生のスケジュールとズレたので悩んでいます。また、履修計画や必要な手続きのタイミングはいつになるのでしょうか。**

→このような学生には、メジャー選択・変更や卒論アドバイザー申請など卒業に必要な様々な手続きのタイミングを ehandbook に基づき改めて説明し、表を用いて視覚的に伝える工夫をしています。これにより卒業までの見通しがクリアになり、不安を払拭できるだけでなく学生自身がいつ何をすべきかが明確になるため自発的に履修計画を立てることが可能です。

- **留学行く前にどの科目を何単位取るべきか、また部活や課外活動とバイトのタイムマネジメントを聞きたいです。留学行く前に就活を始めるべきかも相談したいです。**

→毎年 2 月に国際交流室が主催する説明会で APS から留学前の履修計画についてプレゼンテーションを行なっています。そのため、まず学生に過去の説明会動画や資料の掲載場所を共有し相談先を紹介することで、次のステップへの道しるべを立てています。タイムマネジメントは先輩 IBS への相談を勧めたり、就活のタイミングはキャリアサポート・オフィスへの訪問やキャリアガイドの閲覧を促したりしています。

## ②卒業要件

- 卒業要件の確認を一緒におこなってほしい。
- 自分の履修計画が順調に卒業できるのかが知りたいです。

→このような学生とは、面談中に icuMAP で Graduation Requirement Checklist をみながら卒業要件の各カテゴリーで必要な単位数を満たしているか確認をしています。また、卒業までの学期数、卒業研究開始資格、学生の状況に応じて現実的に達成可能な履修計画を共に考えます。

## ③将来・進路

- 大学院進学に興味があります。5年プログラムに興味があります。
- 就活と大学院進学で悩んでいます。

→進学に悩む学生には、メジャーアドバイザーや先生方、先輩に相談するように案内しています。またキャリアサポート・オフィスでOBOG検索ができることやホームページに掲載されているキャリアガイドというハンドブックを案内しています。

## b. APS の利用者の声

APS では面談後、学生の icuMAP のアドバイザーングレコード掲載の連絡とともに面談のアンケートをメールで送っています。2023 年度に回答された 39 件の回答結果はこちらです。（図 2 参照）

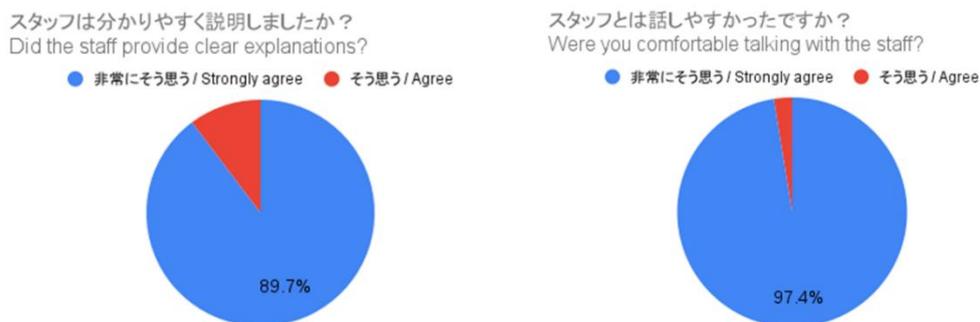


図 2 2023 年度 APS 利用後アンケート (n=39)

## 自由記述コメント抜粋

- 面談する前はどんな厳しいことを言われるのだろうと緊張していましたが、とてもフレンドリーな雰囲気で助かりました！
- 自分の興味分野を深ぼること、また大学院の情報を少しずつ集めていきたいと思いません。
- 留学の生活に集中しており、ICU の情報が得にくく少し不安に思っていたのでオンラインで 30 分間向き合ってください、これからどう大学生活を送っていくのが自分に

とって良いのかを明確にできました。

- 今までにお話した ICU の職員の方々の中で一番話しやすかったかもしれないと思っています。
- ずっともやもやと考えていたのがスッキリしました。

### 3. IBS の 2023 年度利用状況および相談内容

#### a.概要

IBS は 1 学年当たり 7 名ずつ、合計約 21 名の学生がピア・アドバイザーとして履修相談をしています。2025 年 1 月から試験的に予約なしで気軽に立ち寄れる walk-in 面談の時間を拡大し、平日ランチタイムに加え水曜日と金曜日は 3~5 限までオスマー図書館 1 階に常駐しています。

2023 年度に行なった IBS の面談は 382 件、相談件数が最も多い時期は春学期の新入生オリエンテーションでした。年間を通じて低学年からの相談が多いため、特別な事情を除き、2023 年 9 月以降は 1 年生は原則 IBS アドバイジングの利用を促しています。

IBS が受ける相談内容の上位には履修相談を筆頭に留学、メジャー選択、ELA/JLP が多く、学生ならではの体験談が聞けるトピックが並んでいます。（図 3 参照）

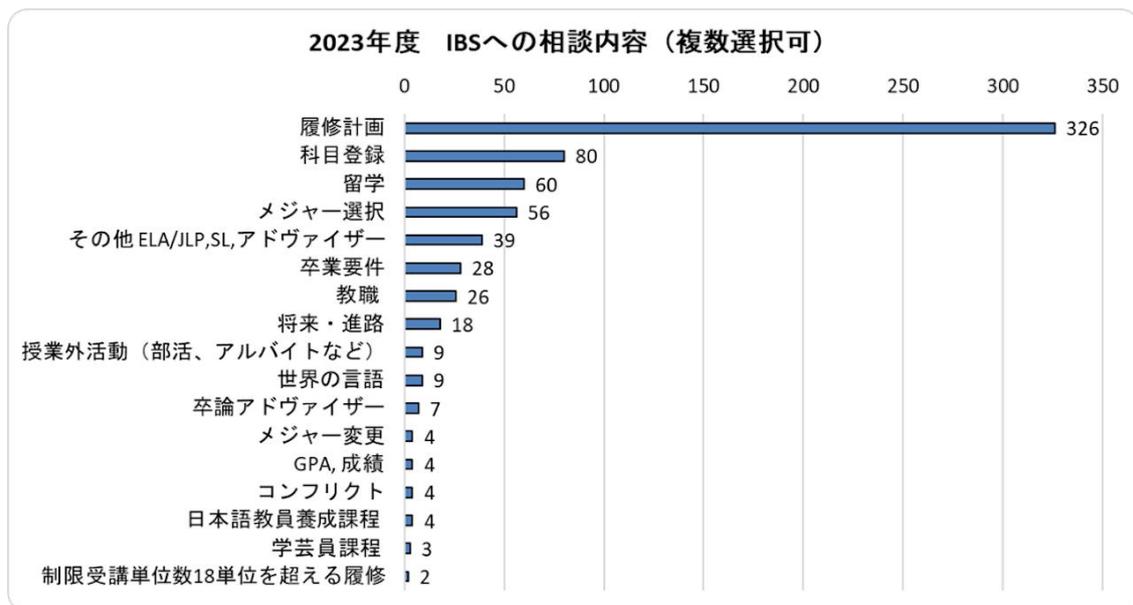


図 3 2023 年度 IBS への相談内容（複数選択可）

#### b.IBS がアドバイザーになるまでの道のり

IBS は十人十色の履修計画に対応するため自主的に研修を行い、履修登録や卒業要件などの基本情報から学内リソースまで学生が見落としがちな情報を把握しています。2023 年度は下記の研修を実施しました。

- 3月新メンバー研修：新しいIBSメンバー（新2年生）を迎えIBSの活動やアドヴァイジングのロールプレイングを実施。
- 5月理念研修：IBSの歴史やアドヴァイジングの心構えなどについて理解を深める。
- 7月教職研修：教職課程を履修しているIBSメンバーを中心に、履修の注意点やリソースの場所等をまとめた資料を確認し、相談にきた想定でロールプレイングを行う。
- 8月JLP研修：9月新入生を迎えるにあたり必要な知識を学ぶ。資料は事前にJLP教員のチェック済み。
- 10月リソース研修：卒業要件、メジャー選択、留学関連、単位互換、トランスファー、5年プログラムなど想定される質問を難易度別にまとめられた資料を見ながら実際に聞かれたときの対応をロールプレイングで確認する。
- 1月サービス・ラーニング研修：プログラムの内容をまとめたプレゼンテーションをもとにスケジュールやサービス・ラーニングを経験したIBSから体験談を聞き質疑応答をした。

#### 4.まとめ

ICUには教員アドバイザー、メジャーアドバイザー、APS、そしてIBSという複数の相談先や支援のチャンネルがあり、学生はこれらを有効に活用しながら自発的学修者となることが期待されます。学生自身がこれらのチャンネルをうまく使い分けるだけでなく、アドヴァイジングの窓口同士も連携することによりICUのアドヴァイジング力を最大化することが期待できます。今後学生の複雑な履修相談を受けたり、悩んでいる学生がいたら、ぜひ職員（APS）や学生（IBS）によるアドヴァイジングも勧めてください。

APSの予約は[こちら](#)

IBSのスケジュールは[こちら](#)



図4 IBSの活動の様子

<sup>1</sup> NACADA: The Global Community for Academic Advising (<https://nacada.ksu.edu/>)



# CTL Brown Bag Lunch & Learn 報告

## 「GEN028 社会における統計分析 ご紹介」実施報告

政治学・国際関係学デパートメント 大森佐和

自然科学デパートメント 清水勇二

社会・文化・メディアデパートメント 森木美恵

2024年5月

2024年1月29日に CTL Brown Bag Lunch and Learn で3人の教員が一般教養科目として開講している「GEN028 社会における統計分析」の科目について紹介するセッションを開催したので報告する。このクラスは、一般教育（GE）数理情報統計コースワーキンググループにて2020年6月から2021年3月の計8回にわたる議論を経て、GEカリキュラムの枠組みの中で「数理情報統計関連」コースを強化する意図のもと、2022年度より設置された今年開講2年目を終えたコースである。

このクラスの学修目的（Learning Goal）は、以下の3つであった。1) 様々な事象を「データ」と呼ばれる数値等の特徴で表すことを学び、データ分析に必要な基本的な数理的概念を学ぶ。2) 現代社会の課題に関してのデータを探し、分析するための基礎的な考え方を学ぶ。3) データ分析の事例について学び、次の統計や数理的分析を用いたクラスへの導入とする、ことを目標とする。つまり、学生が自分たちで関心のある社会のトピックについてデータを用いて分析をしようとする過程で実際にデータに「さわってみる」ことで、データを探し、それらを読み取り、図表に表し分析することの難しさや楽しさを文理の関心を超えて実感してもらうことを目標とした。

クラスは毎週火曜日3限に確率や統計の数学的理解を深めるための数理的な講義を行い（清水担当）、木曜日2-3限にはデータについての実践的な考え方や仮説検定、T検定や回帰分析までを実際にエクセルを用いて行ってみる演習、計量論文の読み方指導と共に、T検定や計量論文を用いた学術論文の紹介を行った（大森担当）。また、データ収集の事

例としてフィールド調査の苦労や実りも授業の中でシェアされた（森木担当）。また、リベラルアーツにおける数理・データサイエンス・AI 教育プログラムを構成する科目の一つとして、AI に関する講義を行い（清水担当）、専門家によるゲストレクチャーも設けた。

このクラスの成績評価は以下の通りである。1) 小テスト: 20% (4回 Moodle 上で実施)、2) グループ発表: 30% (4-5人のグループで発表)、3) 個人レポート: 40%、4) 出席および参加: 10% (ムードルにて集計)。主な成績がグループ発表と個人レポートをもとに評価される構成である。そのために、興味があるトピックを学生に提出してもらい、参考トピックを提示したうえでグループ分け (1 グループ 4-5 人で今回は計 20 グループ) をして顔合わせを行い、講義が早く終わった際にはグループワークの時間を積極的に組み込むなど、グループ発表を徐々に進めていく準備を教員が目配りをしながら木曜日に行った。

グループ発表と個人レポートの課題は同じ内容で良いが、個人レポートは発表原稿の書き起こしは不可とし、学術文献を用いてさらに内容を深める、データ分析をさらに行うなどを必要事項として、以下のグループ発表課題と同じ内容を課した。グループ発表と個人レポートの課題は以下のように3つから1つを選ぶこととした。

### 1. 調べたい内容についての文献調査とグラフ作成をしてみよう

研究の問い (リサーチ・クエスチョン) を決め、文献で使われていたデータを用いて現状や実態、過去の経緯などについて調べる。そして、文献の内容のまとめとともに、自分たちで表やグラフを用いた調査を行う。

### 2. データ (指標) に関する調査をしてみよう

研究の問い (リサーチ・クエスチョン) または中心となるトピックを決め、それに関する指標の種類や測定方法を調べる (例: ジェンダー、SDGs 達成などに関する指標)

### 3. データを集めて分析してみよう

研究の問い (リサーチ・クエスチョン) を決め、たとえば自治体のサイト、企業のサイト、など調査対象を決め、情報を集めて数値化し、結果を表やグラフなどを作成して示す。(例: SDGs やジェンダー平等に関し自治体サイトはどの程度言及しているか? 等)

グループ発表は木曜日の2限と3限の前半組と後半組に分け、各組は1時限内で15分2回ずつ発表を行った。参加者側は2回発表を聞く機会を与えられるわけである。教室を広く使い、各グループは教室内の各場所に各々の発表場所を設置し、パソコンの画面を見せながら発表を行った、学会のポスターセッションのような発表形式である。これは森木先生発案の方式であり、毎年とてもよく機能している。調べた内容の発表の場であると同時に、どうやって発表場所を確保し、オーディエンスの注意を引くか、オーディエンスの聞く姿勢によってどのように発表の質に影響が出るか、など発表すること自体の学修の場ともなっている。

ブラウンバックランチセミナーでは、どこまで学生の発表内容の課題の範囲を広げるかということが話題となった。このクラスでは、サーベイ調査のサンプリングやインタビュー時に必要な配慮など研究倫理に関わることまで網羅することは難しいので、学生の友人間でのサーベイ実施も不可としているが、他のクラスでの事例などの例も出されて議論となった。また、進んだ統計を用いることができる学生にグループ発表では頼りがちにならないようにどう統計分析のレベルを設定していくのがよいかなど今後の課題も見つかっていることが共有された。また、成績のルーブリックについても質問が出された。グループ発表準備中に評価基準を開示して学生が準備に取り組みやすいようにしていることも報告しておきたい。最後になりますが準備してくださった CTL のスタッフやご参加くださった教職員の皆様に感謝申し上げます。

## EMI（英語教授法）：学生をアクティブ・ラーナーにする方法

人文科学デパートメント アムール=マヤール, オリビエ

2024年10月

時に教員は、学生に熱心に教えようとするあまり、学生が自ら取り組むことが最も効果的な学び方であることを見落としてしまうことがあります。学生の学びを支援しているつもりでも、結果的には学生が主体的に学ぶためのプロセスを妨げているのです。私はかつて、学生に多くのことを学んでもらうには、沢山の情報を詰め込み、パワーポイントのスライドに大量の知識を盛り込む必要があると信じていました。しかし、2018年の夏休みに参加した Oxford EMI のトレーニングコースで、この思い込みは打ち砕かれることになりました。

同様に多くの教員は、大規模なクラスでのグループディスカッションやグループワークを適切に管理するのが難しいと思い込んだり、特定のテーマではこの手法が適さないと考えがちです。EMI トレーニングの紹介を行うようになってから、同僚たちが抱えているこのような誤った思いこみを解消するのが楽しみになっています。2018年以降、秋学期に一般教育科目「映画研究への招き」を EMI の原則に基づいて 70 人以上の学生に指導していますが、非常にうまくいっています。

教師がパワーポイントの前で 2 時間講義をするような形式ではないため、一部の学生は、最初はこの新しい学習プロセスを理解するのに苦労する場合があります。一方で、講義形式の授業は効果的な学習方法ではないと不満を言うのも、同じ学生であるという点も事実です。しかしながら、一般教育科目のシステムにより、彼らは授業を聞いて標準化された課題を提出することに慣れ切ってしまうため、成績という問題が中心ではなくなったこの新しいアプローチに、最初は面食らってしまうのだと思います。

最後に、このような新しい学習方法を取り入れることで、教師の仕事がなくなると考えるべきではありません。むしろ、実際は準備の方法が変わるだけで、やるべきことは沢山あります。調整が必要になる初年度は、むしろ増えると捉えてもよいでしょう。各グループが作成した資料のレビュー、1 つの質問に対するさまざまな解答のまとめ、解釈の誤解や誤りが残っている箇所の明瞭化や訂正など、作業のほとんどを授業時間外にやらなければならなくなりました。

大規模なクラスでは、複数のグループに同じ質問に解答してもらうことで、そのテーマについて最も網羅的な回答を得ることができます。また、各解答を組み合わせることで、こちらから提供する資料についても、そのテーマに関する最良のものを提供することができます。こうすることで、強力な根拠を用いた、最高の資料を作成できるようになります。これはまた、学生たちが自分たちで生み出した努力の結晶を、成果物として見れるようにするためにも役立ちます。

多少の課題はあるものの、EMI プログラムの効果はあらゆる面で発揮されています。こ

の効果については、学生が授業を受けている最中は自覚できないことも稀ではありません。

もし学生たちが教師の新しい期待に対応するのに苦労している場合、これは求められる作業量が多いという点でより厳しいから、というのは事実ですが、実際のところ、困難に感じる主な理由としては、一人で学ぶよりもチームで学ぶ方がよりも多くのことを学べると最初は信じられていないからです。また、特定の壁に直面し、それによって自分の能力に自信が持てない場合にも、新しい教育的アプローチが必要になるのは明らかです。

EMI プログラムと、この必要不可欠なツールのおかげで、私は学生がどこでつまづいているのかをよりよく理解でき、その結果として学生には、「学習プロセス」の真の意味を理解してもらうことができました。これについては、ブルーム分類法のピラミッドが非常に役に立ちます。

初回の授業では、この授業で求められる熟練度の段階について説明するために、ブルームのピラミッドについて紹介しています。その際、私はピラミッドの最初の方の段階にあたる「記憶」、「理解」、「応用」だけでなく、後半の3段階にあたる「分析」、「評価」、「創造」についても取り上げます。しかし、多くの学生は、すぐにでも「分析」、「評価」、「創造」の実践に進みたいと感じてしまいます。そのため、そういった学生は、最初は暗記することや、教科書の課題リーディングを熟読することを、しぶしぶ受け入れます。しかしすぐに、習得が求められているこれらの熟練度の段階を駆け上がるのに、グループディスカッションが非常に役立つことに気が付きます。

後半の3段階のスキルは、最初の3つを習得して始めてマスターできるものです。したがって、特定のデータや事実を暗記し、リーディングアサシメントとして課された本のチャプターを読んできたことは、教育的成果をあげるという点では決して無駄な作業ではないのです。

だからこそEMIのテクニックは、授業で扱う内容に対してだけでなく、さらに重要なことに、学生との交流に対しても新しい考え方を提示してくれます。学生たちは一般教育コースであっても、教室でより積極的に、より深く関わることが求められます。

このような教育手法の成果は、学生の立場から見ても多岐にわたります。彼らは、より効果的に学び、授業の内容を長期間にわたってより記憶に留めることができるだけでなく、従来の教授法では考えられなかったほど多くの友人を作ることができました。この手法で教えている授業を履修したことがある生徒と偶然会うたびに、とても大変ではありつつも、どれだけクラスが好きだったか、どれだけ多くのことを学べたか、そしてどれだけ楽しかったかを伝えてくれます。リベラルアーツ大学の講師である私にとって、学生からもらうこのような感想は、やりがいを感じられるこの上ない誉め言葉です！

## すべては一日目から始まる: ノートカード、カラーマーカー、自己紹介の力

歴史学デパートメント ボーランド, ジヤネット

2024年10月

2024年4月9日に開催された Brown Bag Lunch and Learn では、昨秋に200番台の歴史学の授業を担当したときの経験についてお話しさせていただきました。この授業では、1923年の発生から100年の節目を迎える関東大震災に主に焦点をあて、死と破壊、救援と再建、祈念と論争など、さまざまなテーマを取り上げました。私は、この授業を履修する学生に期待することについて、シラバスに次のように書いています。「この授業の成功は、皆さんが出席し、積極的に参加するかどうかにかかっています。200番台の授業は、アクティブラーニングと交流、ディスカッションとディベート、およびエビデンスに基づくアイデアや意見の明確化を促進するように設計されています。教室という協力的な環境を活かして、自分の考えを自信を持って発言できるようになるこの機会を楽しみましょう。」どうすれば、学生が積極的に発言し、意見を共有できる環境を作り出すことができるのでしょうか？どうすれば、学生たちに自信をつけさせることができるのでしょうか？すべては、一日目から始まります。

私の初回の授業は、授業のメインテーマを象徴するパノラマ画像を学生に見せ、「何が見えますか？」と問いかけるところから始まります（この授業の詳細と、見せた画像については[こちら](#)でご覧いただけます）。この際、何人かの学生が答えようとして手を挙げてくれますが、ここでは教室を歩き回って私から学生に声をかけることも大切にしています。基本的には、学生が答えてくれます。簡単な質問ですし、この質問に正解も不正解もありません。次に、私は学生に好奇心旺盛な歴史家の目線に立ってもらうため、「この画像についてより詳しく知るためには、どのような問いが立てられるのでしょうか？」と呼びかけます。誰が？なぜ？何を？どこで？いつ？どのように？それで？といった具合です。このシンプルなアクティビティの目的は、会話とブレインストーミングを活発にすることです。学生たちは、この授業では彼らが積極的に参加することが期待されていることを最初から理解してくれています。このインタラクティブなウォーミングアップ・アクティビティの後には、シラバスについて説明し、残りの授業時間のほとんどは、私の自己紹介に充てます。

自己紹介では、オーストラリアの田舎で生まれ育ち、ICUの助教になるまでの歩みを写真で紹介します。また、神戸の高校に留学していた1995年に経験した阪神・淡路大震災の体験談についてお話しした後、この経験がどのように私の人生とキャリアを形成したかについても説明します。カリフォルニア出身であろうと日本出身であろうと、地震やその他の災害を体験したことがある学生は少なくありません。そのため、パワーポイントの次のスライドには、「地震についての話し合いで気分が悪くなった場合は、いつでも

退室してかまいません」という重要なメッセージを掲載することにしてあります。次に、TAに自己紹介をしてもらい、ちょっとしたヒントやアドバイス、または教訓をシェアしてもらいます。これが終わると、次は学生たちの番です。

私は10年以上前から、一人ひとりがお互いの名前を覚え、さらに呼び合えるように、名前カードを作るアクティビティを取り入れています。学生たちには、このアクティビティが私の教育理念と実践において重要な役割を担っていることを説明しています。私は、学生が安心して発言し、間違いを恐れず、成長し、学び、進歩を振り返ることができる教室環境を作り出したいと思っています。自分の周りに座っている人の名前さえ知らない環境で、全員が心地よく過ごすことはできないと私は考えているのです。

私が授業で使う道具には、学生たちに配るたくさんのカラーマーカーとノートカードなどがあります。B6サイズのノートカード(182×128mm)は、二つ折りにしたときに自立してくれる十分な厚さ(0.25mm)で、教室の前方にいる私から見える十分な大きさをしてあります。ここでは、パワーポイントに以下の手順を表示しておきます。

1. 小グループに分かれ、カラーマーカーをシェアします
2. ノートカードを半分に折ります
3. 教室内の全員が読めるように、カラーマーカーを使って、自分の名前をカラフルな文字で大きく書きます
4. 裏面にはペンを使って、あなたに関する自己紹介を書いてください：
  - i. 名前(呼ばれたい名前)
  - ii. 出身地(生まれたところ)と住んだことのある都市
  - iii. あなた自身に関する、何か興味深いことを教えてください。または、空き時間には何をして過ごすのが好きですか？
  - iv. 地震を経験したことはありますか？もしあれば、いつ、どこですか？
  - v. 今日の授業を受ける以前に、関東大震災についてすでに知っていたことは何ですか？ソースはどこですか？\*
  - vi. 今学期に伸ばしたいスキルを1つ挙げてください。ライティングスキル、授業で発言できるようになる、タイムマネジメントなど、具体的に答えてください
5. 自分のグループメンバーに向けて自己紹介をしてください  
(\*この質問は、授業内容に合わせて変えています)

これらのカードは、学生が失くしたり忘れてしまわないよう、毎回の授業の終わりに回収しています。毎回の授業の始めに65人の学生にカードを配るのには、多少の困難もありましたが、TAの助けを借りて、教室の前方にある大きな机の上にカードを並べています。学生たちには、カードを前方にある入り口で受け取ってから各自の机に置いてもらい、授業終了時にはコメントシートと一緒に返却してもらっています。少人数のクラスでは、教室に入ってくる学生に私自身でカードを配りながら、私の記憶力を試しています。

どの授業を担当する場合でも、画像を見せるところから始め、学生に観察・質問してもらい、シラバスについて話し合った後、名前カードを作ってお互いを知るというこの初日の形式は変わりません。これは、私が実践してきたインタラクティブなスタイルの歴史の授業に最適な方程式です。65人の学生がいる教室でも、名前カードを見れば、手を挙げる学生を名前で呼ぶことができます。また、この名前カードは、学期が始まって最初の数週間は特に、小グループでのアクティビティやディスカッションの際に役立ちます。一日目からお互いの名前を覚えて呼び合うことで、誰もが発言しやすく、質問しやすく、意見を言いやすく、自信をつけやすい、尊敬に満ちた環境を作り出すことができます。

春学期の最後に、ある学生が書いてくれたコメントを以下に紹介します。「今学期は私にとって、とてもチャレンジングでありながらも刺激的な学期でした。私はどちらかというと人見知りするほうで、人前で自分の意見を主張するのが得意ではありません。そのため、今学期が始まった当初は、この授業で自分の意見を言えるかどうか心配でした……。しかしこの不安は、第一週目で大きく解消されました。温かくて安心できる雰囲気だったため……。自然体で居ることができました」。また、他の学生は、次のように振り返っています。「〔このクラスは〕有意義な議論に参加できる、温かくて居心地が良い環境で、とても楽しかったです。（国籍が同じでも）皆さんそれぞれ多様なバックグラウンドを持っており、そんな人たちが積極的に参加しているのを聞いてとても感動しました」。

## QALL402:現場実習による専門学習

社会・文化・メディア部門 ボンディー, クリストファー

—

社会・文化・メディア部門 鄭朱泳

自然科学部門 峰島知芳

2025年3月

### 本コースの始まり

本コースは、社会科学、人文科学、自然科学の方法論やアイデアを横断的に理解することが教員と学生の双方に恩恵をもたらすと信じていた、国際関係学の長尾教授と物理学の北原教授という2人の見識の深い教授によって、2010年に開講されました。以前は西村幹子教授、久保謙哉教授、森木美恵教授が担当していましたが、その後、クリストファー・ボンディー、藤沼良典、鄭朱泳、峰島知芳の我々4名が交代で受け持つようになりました。毎年、社会科学と自然科学の教授がそれぞれ1名ずつ、計2名の教授が共同で授業を担当しています。

### コースの構成と内容

このコースは春学期の講義から始まり、学生はその学期を通して研究計画書を作成して学期末に提出します。これらの研究計画書には、教授陣によるフィードバックが行われます。その後、夏学期と秋学期には、学生がフィールド研究を実施し、アイデアを実践する機会が与えられます。11月には、コースの締めくくりとして研究結果や進捗の発表を行います。

このコースでは、学生はさまざまな分野にわたるフィールド研究について幅広く理解を深めることができます。ICUの教員の協力を得て、春学期には人類学、コミュニケーション研究、環境研究、社会学、考古学、ジェンダー研究、情報科学など、多様な分野のゲストスピーカーをお招きしています。一般的な講義やプレゼンテーションとは異なり、ゲストスピーカーは、直面した課題とその克服方法など、自身のフィールドワーク経験から得た具体的な体験談を共有します。そのため、他のコースでは得られない非常に貴重な知見を得ることができます。さらに、このコースでは、研究可能な問いを導き出す方法、包括的な文献レビューの進め方、そしてそれらの問いを調査する適切な手法の選択方法を学びます。毎年、このコースにはロータリー平和フェローやJDS奨学生を含む10か国以上の国々から学生が参加します。このような多様性は、議論に幅広い視点や課題をもたらし、教室での体験が一層豊かなものとなります。

## 研究倫理申請書に関する学生指導

大学院プログラムの重要な要素の1つとして、倫理的な研究の実施が挙げられます。我々は、学生が研究倫理申請書を提出する準備を整えられるよう、各自の研究に求められる具体的な要件について一緒に検討し、完成した申請書を提出してもらっています。コースの性質上、すべての学生が人間を対象とした研究を行うわけではありません。たとえば、アーカイブ資料を使用する学生もいますが、その場合、直接人と関わることはありません。それでも、倫理的な研究を行うことの意味を理解することは、学生にとって重要です。授業の課題として申請書を完成させる学生もいますが、大規模な研究プロジェクトを視野に入れて準備する学生もいます。いずれの場合も、それぞれの学術分野に特有の申請要件については、アドバイザーと相談することを推奨しています。

## 教員と学生にとってのメリット

### 学生の場合：研究を事前に計画し、論文に着手する前に失敗を経験する機会を持つ

教員として、私たちは研究に潜む落とし穴をよく理解しています。分野に関係なく、私たちは研究において必ず何らかの問題が発生すること（時には深刻な問題も）があると理解しています。しかし、学生たちの視点では私たちが執筆した論文や書籍という完成品しか目にしないため、研究は常に計画通りに進むものだという印象を抱きがちです。このコースでは、研究プロセスには常に予期せぬ要素が存在することを学生に繰り返し印象付けています。多くの学生は、夏季に研究を進める中で、予期しない形でこの教訓を学ぶこととなります。こういった困難は学生にとっては悩ましいものかもしれませんが、計画通りにいかななくても、その研究が持つ重要性は失われないことに気づききっかけになります。さらに、リスクがそれほど大きくない段階でこのことを学ぶ機会が得られることは、学生にとって安心感に繋がっているようです。本番の論文執筆のためにデータ収集を始めた際、すべてが完璧にいくわけではないということを知っていることは、学生が直面するかもしれないストレスの1つを取り除いてくれます。

### 教員の場合：多様で学際的なテーマに触れ、同僚の研究経験を学ぶ機会を得る

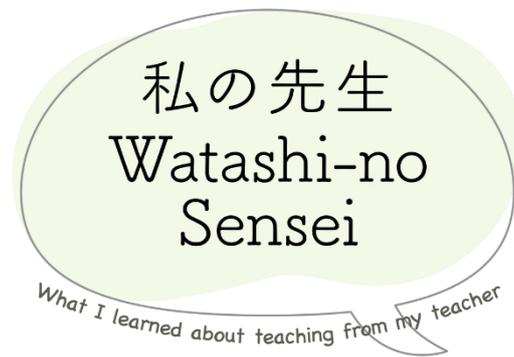
#### 3人の教員の見解

自然科学の研究者として、私の研究では特定の科学分野に焦点を当ててきましたが、このコースを通じてさまざまな分野の教授の講義を聞くことができました。こうした講義の素晴らしい点のひとつは、失敗についても触れられる点です。具体的には、物事が計画通りに進まなかった際に、どのように計画を変更したかなどです。また、地域社会への貢献を通じて信頼を築いた話や、インタビュー対象者をどのように見つけたのかといった裏話も聞くことができました。それだけでなく、研究対象となるグループを代表するサンプルを選ぶ必要があるという点で、共通する課題があることにも気づきました。これは、自然科学の研究においても同様に難しい問題です。自然科学は一見すると明確な答えがあるように思われていますが、実際には非常に複雑であり、研究を進めるほど複雑さが増していくことが多いのです。また、どこに境界線を引くか、それによって結果がどう変わるかと

いう点も、同じであることに気づきました。（峰島知芳）

このコースは、教員である私自身にとっても、あらゆる点で非常に有益なものでした。自然科学の教授と共に授業を担当することは、アプローチや方法論の違いを理解する機会を与えてくれるだけでなく、共通点を見出し、教員としても研究者としても自分の視野を広げる貴重な体験を与えてくれます。また、ウミガメによるマイクロプラスチックの摂取、ロヒンギャ難民のバシアンチャール島への移住、メキシコのフェミニスト社会運動といった学生が取り組む多様な研究テーマに触れることで、世界の課題に対する私自身の関心が広がり、理解も深まりました。個々のプロジェクトへのフィードバックは多大なる精神的な労力を要しますが、それによって視野が広がり、異なる分野間の共通点を見出す力を養うことができました。最後に、このコースでは同僚の研究について学ぶ機会を得ることが出来ました。これは日々の忙しいスケジュールを考えると、めったにない機会です。こうした機会は、私の学問的視野を広げただけでなく、同僚とのつながりを深めるきっかけにもなりました。（鄭朱泳）

このコースに参加できたことは、私にとって非常に幸運なことでした。素晴らしい同僚たちと協力し、多様な背景を持つ学生たちの研究に触れる機会は、非常に意義深いものでした。特にパンデミック以降、残念ながら交流が減少している現状において、他の教員と関わることは、私自身の教育の優先事項について振り返る機会となりました。また、同僚との仕事に加え、情熱を持った学生たち、特に他分野の研究に取り組む学生たちと交流することで、私自身の研究にも新たな示唆を与えてくれました。ある意味、この大学院のクラスは、私たちが目指すリベラルアーツの学際的な特質が最も顕著に表れている場だと思います。このコースは私にとって、非常に協力的な性質を持ちます。教授たちは共同で授業を進めるだけでなく、学生たちとも協力し、彼らが自分の研究をクリティカルに考える支援を行っています。そしてその過程で、学生たちの視点が私たちにも新たな視点をもたらしてくれるのです。（クリストファー・ボンディー）



## 私の先生

～教えることについて、自分の教師から学んだこと～

第3回 人文科学デパートメント 伊藤亜紀

2024年5月

1988年秋、お茶の水女子大学家政学部被服学科に、新任の先生が入られた。聞けばパリで3年半の修行を経て帰国したばかりの、新進気鋭の西洋服飾史研究者だという。容貌もどこか日本人離れしていて、他者を寄せつけない雰囲気があった。

日本語で読める西洋服飾史の本は、モノクロの図版が少々入った、事典風の解説しかない、無味乾燥なものばかりという時代、徳井淑子先生の授業で見せられる図像は、いつも色鮮やかで奇抜な装いの貴族たちが集う雅な世界である。さらに先生は、数々の文学作品から着こなしの意味を探る。美術史家や文学者があまり気に留めない服飾描写が、作品の本質に深く関わるケースもあるのだ。

ひそかに「フランス出羽神」と呼ばれていた先生は、研究にいっさいの妥協を許さなかった。ゼミの発表で、学生の調査が少しでも甘いと、静かに厳しいコメントを出した。私が発表で使いたい図像を見つけられないと訴えると、先生はおもむろに図書室に向かい、棚から一冊の本を取り出して示した。「図書室の本くらい、端から端まで全部見るものよ」。そんな先生ではあるものの、『トリスタンとイゾー』やクレティアン・ド・トロワの物語などの宮廷風恋愛文学作品を紹介するときはじつに楽しそうで、ロマンティックで乙女な一面もお持ちなのだと思ったものである。

私は徳井先生のもとで博論を書き、その後助手や非常勤講師を務め、翻訳や論集執筆など、じつにたくさんの仕事をご一緒させていただいた。先生の研究に対する緻密さ、ストイックさは、今日まで一貫して変わらない。期限厳守は言うまでもなく、たとえ下訳でも、高い完成度を求める。私事を言い訳にしない(なにせ留学中、一度も帰国せず、ひたすら知識の吸収に邁進した方である)。それは現代社会では失われた厳しさなのかもしれないが、たった一度のいい加減な仕事が、その人物の印象として終生残るということも、また事実なのである。

先生に初めてお目にかかってから、36年経った。そのあいだにいつしか研究を超えたお付き合いとなり、先生のさまざまな人となりに触れた。私のイタリア滞在中には、何度か温かいお手紙をくださった。博論の最終段階には、夜10時頃まで根気強くご指導をいただいた(一度面倒をみると決めた学生には、とことん付き合い、決して見離さない)。先生のご自宅で、ワインを飲みつつ、一晩よもやま話に花を咲かせたこともある。

近年では先生とオンラインでお話することが多くなったが、話題の半分以上は親の介護となった。学生のときには雲の上の存在だと感じたひとりの女性研究者の生き様を、私はまだ追いつけている。

## 第4回 社会・文化・メディアデパートメント 青沼智

2025年3月

元来私は、他人から教えられることが得意ではない。この困った性格は大学で教えることを生業とする今もなお続いている。

そんな天邪鬼な私にとって、松本茂先生は数少ない「私の先生」だ。初めて先生とお会いしたのは、私が学部生の時である。当時先生は、当時私が通っていた大学の非常勤講師をされていた。その頃、私は所属する英語サークルのディベートチームメンバーとして、平日は図書館に籠ってリサーチ、週末は大会参加と学業そっちのけで英語ディベートに入れ込んでいたのだが、悲しいかな全国大会ではなかなか勝つことができない。そこで米国の大学院時代にディベートコーチをなされ、カレッジディベートに精通していた松本先生にコーチングをお願いすることになったのだ。

ディベートについての細かい話はここでは割愛するが、松本先生から学んだのは、議論に勝つための付け焼き刃的な秘策ではなく、真っ当な議論を正攻法に論じることの重要性であった。「まともな議論ほど質の高い証拠資料が数多く集まる。」相手の反論を恐れるがあまり奇を衒った議論に走りがちであった私にとって、まさに目から鱗の金言であった。

先生のコーチングを受けた私たちは、3年次の最後の全国大会で悲願の優勝を達成する。通常はここでサークル活動はきれいさっぱり引退、4年次は卒論執筆や就職活動に勤しむということになる。ただ松本先生は「優勝は素晴らしいが2,3年ディベートをただで満足すべきではない。アメリカの優秀なディベーターはハイスクールからカレッジまで、足掛け7~8年もディベートをしている。」などと冗談混じりで「挑発」してきた。加えて、米国の大学院には科目履修や研究に勤しみつつディベートのteaching assistantとして学費免除や給与を得ている元ディベーターの学生が少なくない、外国人留学生であっても能力が認められればそのようなポジションにつくことができる等、非常に魅力的な米国のディベート事情についても話をしてくれた。就職活動開始日前、卒業後の進路について確固たる考えがなかった私にとって、先生の「挑発」に乗らない手はなかった。かくして私

は学部 4 年次もディベートを続け、卒業後渡米、大学院生兼ディベート・スピーチを教える teaching assistant としての生活を送ることになる。

ちなみに米国時代、かつての私同様、その場しのぎの付け焼き刃的な議論戦略に走りがちな学生ディベーターを嗜めるべく私が用いたのは、先に挙げた松本先生の金言、つまり「まともな議論ほど質の高い証拠資料が数多く集まる。」であった。

40 年来、松本先生とは公私ともどもお世話になりっぱなしである。今も年に数回お会いする機会があるが、その度にディベーターとディベート・コーチの関係に戻る不思議な感覚がある。

## 2024 年度 FD 活動一覧

開催日	イベント・セミナー名称/講演者 リンクをクリックすると活動報告をご覧になれます。	参加人数
2024/4/3	<p><u>2024 年度春学期 新任教員 FD プログラム (NFDP)</u></p> <p>①NFDP ウェルカムセッション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2024 年 4 月着任者と CTL センター長、副センター長、2023 年度着任者の交流 (Meet &amp; Greet)</li> </ul> <p>②ICU エッセンシャルズセッション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>NFDP の概要や今学期の授業運営および研究についての説明</li> <li>質疑応答</li> </ul>	21 名  13 名
2024/4/3	<u>TA オリエンテーション</u>	70 名
2024/4/9	<p><u>春学期 Brown Bag Lunch &amp; Learn</u></p> <p>BBL&amp;L #31 "すべては第 1 週から始まる: ノートカード、カラーマーカー、自己紹介の力" 歴史学デパートメント ボーランド, ジャネット助教</p>	15 名
2024/9/3	<u>TA ワークショップ</u>	59 名
①2024/9/10	<p><u>2024 年度秋学期新任教員 FD プログラム(NFDP)</u></p> <p><u>対面セッション</u></p> <p>パート 1: Your ICU</p> <p>第 1 回: ICU の基礎、価値と使命、そして未来 学務副学長 エスキルドセン, ロバート特任教授</p>	対象者 16 名
②2024/9/17	<p>パート 2: Your Courses</p> <p>第 2 回: ICU 教養学部とリベラルアーツ教育 教養学部長 生駒夏美教授</p>	
③2024/9/24	<p>パート 3: Your Students</p> <p>第 3 回: ICU 生について知ろう 学生部長 木部尚志教授、CTL センター長 那須敬教授、大学カウンセラー 寺島吉彦氏、渡辺暁里氏</p>	
④2024/10/8	<p>第 4 回: ICU における学生支援 教養学部長副部長 (学修支援担当) 直井望准教授、CTL センター長 那須敬教授、副センター長 辻田麻里准教授、LAS スタッフ</p>	
⑤2024/10/15	<p>パート 4: Your Teaching</p> <p>第 5 回: インTRODクションと問題共有 大学院部長 大森佐和教授、CTL センター長 那須敬</p>	

<p>⑥2024/10/21-25</p> <p>⑦2024/10/29</p> <p>⑧2024/11/5</p>	<p>教授</p> <p>第6回：授業訪問週間</p> <p>第7回：授業ワークショップ CTL センター長 那須敬教授、副センター長 辻田麻里准教授</p> <p>パート5：Your Community</p> <p>第8回：キリスト教とICUの歴史 宗務部長代行 オルバーク, ジェレマイア特任教授、北中晶子牧師、ジョンソン, ポール牧師、焼山満里子准教授</p> <p><u>オンラインコンテンツ</u></p> <p>行政事務グループ</p> <p>IT センター</p> <p>図書館</p> <p>教養学部事務グループ</p> <p>大学院事務グループ</p> <p>教務グループ</p> <p>人事グループ</p> <p>学修・教育センター、学修アクセシビリティ支援室</p> <p>研究戦略支援センター</p> <p>カウンセリングセンター</p> <p>人権相談窓口</p>	
<p>2024/10/22</p> <p>2024/11/8</p>	<p><u>秋学期 Brown Bag Lunch &amp; Learn</u></p> <p>BBL&amp;L #32 “QALL402:現場実習による専門学習” 社会・文化・メディア部門 ボンディー, クリストファー上級准教授、社会・文化・メディア部門 鄭朱泳教授、自然科学部門 峰島知芳上級准教授</p> <p>BBL&amp;L #33 “AIと教育を考える” 日本語教育プログラム 小澤伊久美課程上級准教授、自然科学部門 松村朝雄准教授、CTL センター長 那須敬教授</p>	<p>15 名</p> <p>25 名</p>
<p>2024/12/10</p>	<p><u>冬学期 Brown Bag Lunch &amp; Learn</u></p> <p>1. BBL&amp;L #34 “クリティカル・フリー・ライティングの活用：トピックを特定し絞り込む初期段階における学生をサポートする” リベラルアーツ 英語プログラム サイモン, エバンス レクチャー</p>	<p>6 名</p>

2024/12/17	<u>2024 年度冬学期大学院 FD セミナー</u> “学際的な大学院教育に向けて” 自然科学デパートメント 藤沼良典准教授	96 名
2025/2/26	<u>2024 年度 FD/SD セミナー（障害学生支援）</u> 心の壁を越えるには～障害者差別解消法改正を受けて 私立大学に求められる対応～ おおごだ法律事務所 大 胡田誠氏	76 名
2025/3/21	<u>2024 年度冬学期大学院 FD セミナー</u> “How I got involved in IB: Facets of my teaching” 教育学・言語教育デパートメント ランガガー,マーク上級准教授	24 名